立命館大学震災支援活動情報ネットワーク
〔311+R net〕

活動報告書

【2015 年度編集・発行】

立命館大学震災支援活動情報ネットワーク（311+Rnet）
活動報告書作成実行委員会

はじめに

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災に伴う甚大な被害に対して、日本全国のみならず世界各国からも多くの人たちが支援を行った。本学においても、さまざまな活動が自主的にあるいは公的に行われていた。そんな中で、自主的な支援を希望する学生たちに対して学生部とサービスラーニングセンターが共同で活動の場を提供することになった結果、立命館大学震災活動情報ネットワーク（311+Rnet）が誕生した。

311+Rnet に関わった学生たちはその力を余すことなく発揮し、支援活動に取り組んだ。その内容はこの報告書に詳しく述べられているので、ぜひご一読願いたい。M9 という巨大な災害がもたらした被害の甚大さに対して、われわれ教職員も含めて無力感に襲われた。しかしながら、学生たちはそのフットワークの軽さと、想いの強さを武器に、被災者及び被災地に対して、さまざまな活動を行っていったのである。

その活動の主役はもちろん学生たちであるが、学生たちの活動もまた多くの人たちによって支えられていた。立命館大学の教職員は、その立場や部署の壁を越えて 311+Rnet の活動や学生の支援を行っていた。災害に限らず、困難な状況に陥った人たちを助け、支援する行動は必ずしも直接的でなくても良く、また支援者の支援という何重にも重なった関わりによって成り立っている。311+Rnet は、学生を主役とする教職員を含めた大きな支援の輪だったのではないだろうか。

311+Rnet 活動の終了にあたり、サービスラーニングセンター・センター長として、こころから労いの言葉を贈りたい。

震災発生から 5 年が経過し、関心の低下が大きな問題となっている。しかしながら、学生の関心は依然として高く、被災日おける支援のニーズも変化してはいるが無くなることはない。今回の 311+Rnet 活動終了は被災地に関わり続ける上での一つの通過点として捉え、今後もサービスラーニングセンターとしての支援はもちろん、学生の自主的な支援の思いを受けとめる方策を検討していく。そのためには、本報告書に書かれた内容を多くの人たちに共有していただき、忌憚のないご意見を頂戴できればと切に願っている。

立命館大学サービスラーニングセンター
センター長　坂田 謙司

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災は、観測史上最大の地震による揺れと津波により、死者・行方不明者は 18,000 人以上、建築物の全壊・半壊あわせ 40 万戸以上という甚大な被害をもたらしました。本学では震災発生当初から学生・生徒・児童・教職員の安否確認をはじめ、被災した学生への経済支援、現地へのボランティア活動の窓口設置等々の対応をおこないました。

震災直後から連日報じられた甚大な被害情報は、日本だけでなく世界の人々にとっても己の人生観・世界観に大きな影響をもたらしました。極限状況の中で我々はどう生きるべきなのか、東北の復旧・復興のために自分は何ができるのか、どう関われればよいのか、それぞれの生き方にかかわる深い問題を強く突きつけられたのです。

立命館大学震災復興支援活動情報ネットワーク（311+Rnet）は自ら現地へ向かい災害復興を担うのではなく、東北へボランティアに行きたい学生への情報提供やコーディネート、あるいは関西でもできる活動の情報提供やイベントの創出を目的として発足しました。関西で活動することは被災地を目の当たりにして活動することと比べると実感が持ちにくく、刻々と変化する現場の状況やニーズを把握して活動することは難しくもあり、もどかしさもあったようです。しかし学生たちはこのような環境下でも学生同士や教職員、地域の方々などからの協力を自ら得ながら、支援のネットワークの輪を次々と広げていきました。改めて学生の皆さんの持つ熱意と可能性を感じさせてくれました。

震災発生から時が経過し、支援の在り方や現場のニーズにも変化が出てきています。震災からの復興はまだ終わったわけではありませんが、他方で地震に限らない大雨や台風などによる自然災害の脅威が、私たちの身の回りに常に存在し続けています。東日本大震災を契機に私たちは多くのことを学んだはずです。そのことを再確認し、それを社会における今後の生き方にどのようにつなげていくかを考え続けることが大切です。本報告書が支援に関心を持つ学生にとって未来への一歩を踏み出すきっかけになるよう活用されることを願います。

立命館大学学生部
部長　山本 忠

目次

はじめに 1

第 1 章　立命館大学震災支援活動情報ネットワーク（311+Rnet）概要 4

(1)立命館大学震災支援活動情報ネットワーク（311+Rnet）とは 4
(2)ネットワーク団体一覧 6

第 2 章　歴史変遷 14

(1)座談会　311+Rnet を振り返る～成立秘話～ 14
(2)311+Rnet を振り返る～活動終了にあたって～ 25
(3)311+Rnet の活動一覧 27

第 3 章　活動終了に寄せて 31

(1)メッセージ 31
(2)後世へ 39
(3)情報発信・新聞掲載一覧 42
(4)公表文書等一覧 43
(5)編集後記 44

第１章　立命館大学震災支援活動情報ネットワーク（311+Rnet）概要

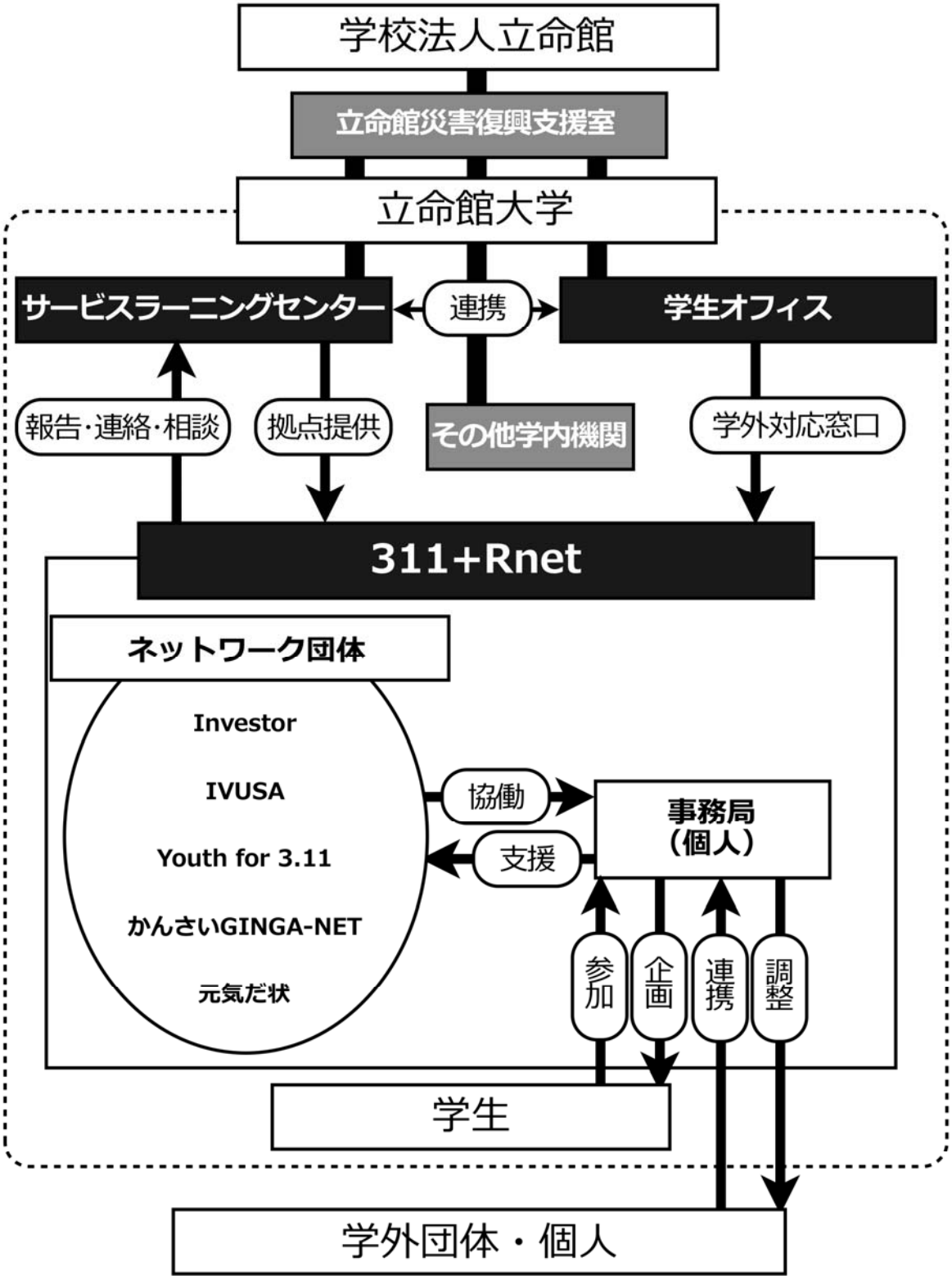
(1)立命館大学震災支援活動情報ネットワーク（311+Rnet）とは

立命館大学震災支援活動情報ネットワーク（以下、311+Rnet）は、2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災を契機に、復興支援活動に関わる立命館大学の学生や教職員・関わりたいと思っている立命館大学生同士のネットワークとして発足し、主に震災支援ボランティア関連の情報提供や、学生の活動、体験についての報告・情報を蓄積し、交流・共有する役割を担ってきた。運営においては、立命館大学の学生が主体となり、立命館大学の学生オフィスやサービスラーニングセンター共同支援のもと、学友会や災害復興支援室等の学内機関と連携して行った。また、立命館大学の学生だけでなく、関西に住む多くの学生や社会人、団体とも関わってきた。

311+Rnet は、発足時は「何かできないか」「何か役に立ちたい」と動いた学生とそれらをサポートする教職員が集まり構成されていたが、月日が経つにつれネットワーク団体と 311+Rnet 事務局で構成されていった。この中で、311+Rnet 事務局は主にネットワーク団体と学生や大学をつなげる役割を担ってきた。ネットワーク団体とは、ボランティア情報の収集先であり、震災支援に関心を持った学生のための紹介先でもある。ネットワーク団体には後述する Investor、IVUSA、Youth for 3.11、かんさい GINGA-NET、元気だ状、参考書宅救便、そよ風届け隊、学生コーディネーターなどが主に所属していた（2014 年 3 月時点）。311+Rnet 事務局はネットワーク団体と協力して、学園祭で団体紹介・活動報告の開催することや、各団体のイベントに参加・補助してきた。また、ボランティアに参加したい・何かしたい、と相談に来る個人の学生に、ニーズにあったボランティアやイベントの情報を提供するコーディネート活動も行ってきた。

311+Rnet としての活動は、団体発足当初の現地の状況や当時の 311+Rnet の活動内容と、時が経つにつれて変わっていった現地の状況や活動内容との間にずれが生じたことがきっかけとなり、話し合いを行った末、2014 年 3 月をもって活動の終了が決定した。

震災復興支援のボランティアコーディネートなどの 311+Rnet 事務局業務は活動拠点を提供する立命館大学サービスラーニングセンターが支援し、活動の一部を学生コーディネーターが担っている。



活動終了時の 311+Rnet の関係図
（事務局作成の図にサービスラーニングセンターが加筆）

(2)ネットワーク団体一覧

本節では、311+Rnet を語るにあたって欠かせないネットワーク団体を紹介する。それぞれの立場から 311+Rnet の活動に関わり、時に現地の情報提供、時に所属団体のみならず多くの学生の巻き込み・参画を目的として 311+Rnet と共同での企画・運営を行ってきた。以下の表は、311+Rnet 設立当初から最終年度までの 3 年間に所属したネットワーク団体の一覧である。また、次ページからは最終年度の 2013 年度に主に活動し、現在もなおそれぞれに活動されている（一部活動終了している）ネットワーク団体 6 団体の紹介である。なお、団体紹介にあたっては、各団体のウェブサイト等を参考に事務局が執筆した。

団体名	団体概要	活動年度		
		2011	2012	2013
らくだ （現在は活動終了）	学生がつくるチャリティカキ氷「らくだ」。衣笠キャンパスの東門出てすぐのところに出店。1 食 100 円で収益は全額寄付。2011 年秋頃からは学習支援や生活支援などを行う活動に展開された。	○		
Meet Source （現在は活動終了）	震災ボランティアへの啓発活動を目的に震災ボランティア＆立命震災支援団体の活動紹介ムービーを上映した。	○		
taRo （現在は活動終了）	震災を受けて滋賀県に避難されている方を対象とした活動。学生と避難者、地域住民が交流できる交流サロンを行ってきた。	○		
IVUSA	「国際協力」「環境保護」「地域活性化」「災害救援」の 4 つの分野を軸に活動。東日本大震災では、多くの所属メンバーが現地で活動している。	○	○	○
ミンナ DE カオウヤ （現在は活動終了）	被災エリアの授産品を日本全国で販売して、被災した障害者の収入・福祉事業所の経営を支える「参加型」プロジェクト。	○	○	
Investor	「社会貢献を日常化する」、「楽しい防災を提供する」、「若者に多様な価値観を与える」を基に活動。東北スタディーツアーや防災活動に取り組んでいる。	○	○	○
Youth for 3.11	東日本大震災がきっかけとなり学生によって設立された NPO。特に『学生ボランティアの活性化』をモットーに、学生の団結によってできる支援をカタチにするべく活動している。	○		○
Rits BLOH	人々の生活環境の改善を通じて、世界の貧困問題の解決に向け日々活動している国際 NGO サークル。東日本大震災では、現地にて活動を行った。		○	
かんさい GINGA-NET	2011 年度に開催されたいわて GINGA-NET プロジェクトをきっかけに、東北支援、関西での災害支援、学生のネットワーク作りを目的として関西の学生を中心に立ち上げられた団体。	○	○	○
参考書宅救便	東日本大震災により被災した受験生へ学習教材を支援するために発足した団体。		○	○
そよ風届け隊	多くの学生に福島へ行ってみてほしい、福島の事を他人事にしてほしくないという思いから 2012 年 10 月に発足。関西の大学生主体で福島の大学生と協働しつつ仮設住宅での傾聴活動他ボランティア活動を行っている。		○	○
元気だ状 （現在は活動終了）	復興に向けて一生懸命頑張っている被災地の人々、被災企業の方々の声を全国に届けたい、という想いから始まったプロジェクト。			○
学生 コーディネーター	教職員と共にサービスラーニングセンターの運営を担い、同じ学生の立場から、ボランティアをしたい学生への活動紹介や相談・サポート等を行っている。	○	○	○

Investor

震災支援に興味がある学生が交流できるイベントや、東北観光とボランティアを組み合わせたスタディツアーを企画、運営している団体。「社会貢献＝自己投資という考えがあってもいいのではないか」との問題提起から誕生したため、団体名を Investor（投資家）としている。

Investor では学生が主体的に活動を行い、またその活動を継続するために団体理念＝存在理由と定義し、メンバーの全員が暗唱できるように簡潔な三つの団体理念（存在理由）、「社会貢献を日常化するために存在する」「楽しい防災を提供するために存在する」「社会に多様な価値観を与えるために存在する」を掲げている。

活動内容として、「観光」と「ボランティア及び学び」を組み合わせたバスツアーであるスタディツアー、「防災」と「キャンプ」を組み合わせた防災活動である防災キャンプ、参加者を中心に定期的に交流イベントを開催する交流イベント、その他に被災地支援や防災・減災に関する講演活動などがある。

参考：http://investor311.info

国際ボランティア学生協会　IVUSA

IVUSA の前身は、1992 年に国士舘大学から始まった組織で、その後様々な大学の学生の参加で活動の幅が広がり、現在では、「国際協力」「環境保護」「地域活性化」「災害救援」の 4 つの分野を軸に活動をしている。

東日本大震災に関しては、2013 年度末までで、計 44 回の活動を現地で行い、延べ 3,266 人が参加している。具体的な活動としては、倒壊家屋の片付け、被災家屋の床板はがし、被災家屋の床板はがし指導、ヘドロかき、石灰撒き、ガレキ撤去、復興青空市場のお手伝い、炊き出し、物資の輸送など。また、全国各地で募金活動を行い、日本赤十字社に寄付などもしている。その他にも、世田谷区の下北沢の商店街と連携して、被災地の子どもたちに靴を寄贈する「シンデレラ・プロジェクト」や新潟県十日町市の耕作放棄地で栽培した野菜を販売して、収益を被災地に寄付する「サンライズ・プロジェクト」なども行っており、現地のニーズに合わせ「学生でもできること」「学生だからできること」をモットーに活動している。311+Rnet で活動していたのは IVUSA 立命館支部である。

参考：http://www.ivusa.com

Youth for 3.11

東日本大震災の被災地復興のために、2011 年 3 月 11 日に東京大学をはじめとする学生によって設立された NPO 団体。特に『学生ボランティアの活性化』をモットーに、学生の団結によってできる支援をカタチにするべく活動している。学生にとって参加しやすいボランティアの機会を提供し、ボランティアと学生をつなぐことで社会問題に向き合える若者を増やしていく活動をしている。

ボランティア活動に興味を持つ学生を集めて登録してもらい、学生ボランティアのプラットフォームを作っている。そのことにより、各 NPO や NGO からの依頼に応じて登録学生にボランティア情報を紹介し、適切な団体・場所・時期に最適な人数の学生が現地ボランティアスタッフとして復興支援に携わることを可能としている。

更に、現地までの無料バスの手配、学生ボランティアの飲食物の配給、学生ボランティア同士の繋がりの構築、活動記録やリフレクションの共有による学生の成長、外部への発信など、現地でのボランティア活動において学生が各種サポートを受けられるような仕組みづくりをしている。

具体的には、学生を現地ボランティアスタッフとして、提携先の NPO や NGO、自治体と共に復興支援を行い、宿泊所、食事などを安価で提供するハードルの低いボランティアプログラムの提供､体験者や他団体 NPO など､社会活動に取り組む人を取材し､まとめたものを学生に発信し、2 カ月に 1 回程度、東北での活動報告や他団体とのコラボレーション、社会を良くする働き方など毎回異なったテーマで、現地で活躍する方との交流を図るイベントの開催などをしている。311+Rnet で活動していたのは Youth for 3.11 関西支部である。

参考：http://youthfor311.jimdo.com、https://ja-jp.facebook.com/youthfor311

かんさい GINGA-NET

大学生による被災地支援活動を企画、運営している NPO 法人いわて GINGA-NET との繋がりのもと、東北支援、関西での災害支援、学生のネットワーク作りを目的として関西の学生を中心に立ち上げられた団体。関西で災害復興支援にかかわる人たちのつながりづくり、関西での防災、減災活動、復興支援団体の支援などをしている団体。

被災地に対して何かしたい、という思いを持った学生、社会人のネットワークづくりの場であり、ワークショップなどを通じて学生同士の思いや情報の共有を図り、関西からできることや地域でできることなどを話し合う「復興 café」。災害発生時の状況を想定して行う「サバイバルキャンプ」。緊急搬送法や炊き出し、野外炊飯の方法など、被災時に使える色々な技をワークショップを通じて学ぶ「防災キャンプ」などの活動をしている。

参考：https://twitter.com/kansai_ginga

元気だ状

「元気だ状」は、復興に向けて一生懸命頑張っている被災地の人々、被災企業の方々の声を全国に届けたい、という想いから始まったプロジェクト。震災後にめでたいという意味があり、出しにくい年賀状の代わりに、感謝の気持ちや元気であることを伝えるために、「元気だ状」を製作し、ハガキならではの温かさ、伝えられる想いを被災地に届けるのに役立てた。「元気だ状」は様々な大学の学園祭などのイベントで販売してきた。また、被災地に足を運び、「元気だ状」を配ることや、被災者の声を聴くなどの活動もしてきた。現在は活動を終了させている。

参考：https://ja-jp.facebook.com/genkidajo

参考書宅救便

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災により被災した受験生へ学習教材を支援するために発足した団体。「東北のために何かしたい」という東北支援への想いを各家庭にある古本を提供してもらうことによって実現している。学生は使わなくなった参考書の寄付を募り、寄付された参考書や読み終わった書籍を再販売して得た収益で、新しい参考書を被災地で購入している。被災地での購入により、経済の活性化を図り、また、震災を機に学習機会に恵まれなくなくなった、あるいは進学をあきらめている中高生に参考書を提供して学習・進学の応援をしている。この活動で、若い世代から震災の風化を食い止める役割を果たすことも目標としている。311+Rnet と活動をしていたのは参考書宅救便立命館支部である。

参考：http://ameblo.jp/sankousho311/、https://ja-jp.facebook.com/sankousho311

そよ風届け隊

多くの学生に福島へ行ってみてほしい、福島の事を他人事にしてほしくないという思いから2012 年 10 月に発足。関西の大学生主体で福島の大学生と協働しつつ仮設住宅での傾聴活動他ボランティア活動を行っている。立命館大学生を中心とする関西の学生で構成されていて、主な活動として、被災地へのツアーの企画、福島県いわき市にて原発事故や津波被害から避難している方の仮設住宅での足湯などの傾聴活動を行っている。

また、報告書の作成、勉強会も開催をしている。報告書の作成では、今まで行ってきた現地（福島県いわき市）での 3 回の活動において、到達点と課題点を明確にし、今の活動の状況を理解してもらい、今後出会う人、団体、関西の学生に向けて広く見てもらい、そして今までの活動を踏まえた発展的な活動が実施することを目標としている。

勉強会では、関連書籍の購入を通して、遠隔地からの支援活動を考え、福島（特にいわき市、楢葉町）のことを学ぶ機会としている。団体のメンバーに留めず、震災支援に携わったことがある学生や福島に関心がある学生にも参加を募り、より広い視野で支援活動を考えること、そして福島での現地の活動の参加に繋げていくことを目的としている。

参考：https://ja-jp.facebook.com/soyokaze.huu、

第２章　歴史変遷

(1)座談会　311+Rnet を振り返る～成立秘話～

2014 年 8 月 18 日、本報告書作成にあたり、当時大学職員として関わった方や成立当初メンバーに集まっていただき、現役学生と座談会形式で成立秘話についてお話しいただいた。本節は、その記録をまとめたものである。

〇座談会メンバー（順不同、＊司会進行）

河村　優衣……. 元 311+Rnet 事務局メンバー、立命館大学法学部 4 回生
小林　政夫……. 元立命館大学サービスラーニングセンター主事
佐藤　敬二……. 元学生部部長、立命館大学法学部教授
清水　大地……. 元 311+Rnet 事務局メンバー、立命館大学文学部 4 回生
柳瀬　顕……. 元 311+Rnet 事務局メンバー、立命館大学卒業生
＊山口　洋典……. 立命館災害復興支援室チーフディレクター、立命館大学共通教育推進機構准教授

〇オブザーバー

二宮　絵美……. 元立命館大学共通教育課、立命館アジア太平洋大学アカデミック・オフィス
高橋　あゆみ…. 立命館大学サービスラーニングセンター主事

311+Rnet 成立にあたって

山口：このメンバーが一堂に会することは初めてですが、何か懐かしい感じがします。唐突ですが、皆さん 311+Rnet に関する一番古い記憶は何でしょうか。

佐藤：記憶を思い出して、私の覚えている限りでお話ししたいと思います。地震が起こった時、私は東京にいて安否確認を受けた側の人間でした。まさに会議をしている最中で、急いで机の下にもぐりました。その後、いわゆる「帰宅困難者」になりましたが、夜遅く新幹線が動いたので、夜中の 12 時ぐらいに京都に戻ることが出来ました。東京は現地ではありませんがそれでも大変な状況でした。しかし、京都駅から乗った京都のタクシーの運転手さんとの意識の違いは大きかったですね。京都は何もない平穏なところで全く震災のイメージがないんですよ。これは多分、活動していた皆さんがいつも思われることだと思いますけど、現地とそれ以外のところは意識ギャップみたいなものがありますよね。私はまず 3 月 11 日のその日にそれを感じました。
大学の動きについて喋らせていただきますね。大学は 3 月 11 日の翌日から毎日、大学の各部局の責任者が集まって情報交換を始めました。これが後の災害復興支援室へとつながっていきます。そこの議題は最初は安否確認が中心でしたが、その後研究部であれば復興用の防災缶を現地に送るとか、各部局が復興支援に動き始めましたので、その情報交換や調整の議題が多くなっていきました。学生部にも当然、学生から支援のために何かしたいのだけどどうしたらいいんだろうという相談とか、ボランティアに行きたいという相談がたくさんありました。ところが、大学としては、最初の数日はボランティアに行かないようにと言っていました。ここまで露骨な言い方ではないんだけど……

山口：少なくとも学生の思いを抑えてましたね。特に現地に向かいたいという思いを。

佐藤：そうですね、慎重にしろというような声明をホームページにも出していました。現地の状況が分からず、現地の受け入れ体制も整っていないので、ボランティアに行ってもかえって迷惑

になるかもしれないといったこともあって、最初は抑えていました。この考え方がいいかどうかの評価は分かれると思うのですが、私個人の意見では、危険を分かった上で飛び込んでいくことは必要だろうと思うのですけど、大学の立場としてはやはり学生の安心・安全がベースなので、そういう判断をしていました。ですが、それは最初の数日の話で、やっぱり学生からの問い合わせが強くて、ボランティアなどの何かアクションを起こしたいと思いました。そのとき考えたのが 2 つあって、1 つは大学主催で何かをやるということ。これは今もボランティアバスの運行などおこなっています。もう 1 つは学生が自主的に動くことをどうサポートできるのかということが課題になっていました。

この課題に対して大学の立場からいうとやはり安心、安全を考えたいと思っていたので、すでに現地で活動している学生達にどんな状況でどのようなやり方があり得るのかということを話してもらおうじゃないかという話になりました。山口先生とか、当時のサービスラーニングセンターや学生部の先生方や職員の皆さんが集まってそんな話をしたというのが出発点だったと思います。最初の段階ではこんな方向性でということは余りイメージがなく、集まった学生の皆さんの話を聞いてみてというところからスタートしました。そこに集まってきた学生たちが既にもうボランティアの経験を持っていた人たちで、それぞれのバックグラウンドがあったので、ボランティアサークルを立ち上げるような方向ではなく、やっぱりネットワークみたいな形の動きになったのかなと私は思っています。

山口：今日の座談会の鍵になる視点が幾つか出てきました。学生部長でおられたという立場もあって、濃密なお話でした。続いて、佐藤先生の次に濃い関わりを持った柳瀬くん、お願いします。

柳瀬：3.11 当日、私は京都リサーチパークの町家スタジオというところにいて、新しいメディアを使ってどう新しい社会をつくっていけるかというようなテーマでイベントをしていた時に震災がありました。その時の話のテーマに関連して、2011 年 2 月のニュージーランドの地震でソーシャルメディアなどが、有効に活用された事例をシェアしていただきながら、今回の震災で、私たちは何ができるんだろうかということを話していたのが、私の 3.11 当日でした。

山口：あの日は金曜日の午後でした。Twitter を活用して情報収集をしたのをよく覚えています。

柳瀬：その後、災害復興の研究をしていたなじみの人とともに、兵庫の被災地 NGO 協働センターに行きました。その事務所のほうでお手伝いさせていただいたり、立命館で防災缶 iBOUSAI のお手伝いをさせていただいたりというのが最初の頃でした。

初期のフェーズでは結局東北には行かず、京都あたりのいろんな動きに応じて後方支援をしていました。その間、仲間と会って、どうにもこうにも状況がつかめない部分と、東北から帰ってきた、東京から帰ってきた仲間たちがものすごく混乱していて、みんな何かやりたいけど何をしたらいいのかわからないという、通常じゃないような状態がちょうど 3 月の中盤ぐらいにありました。その後、「大学でみんなでとりあえず集まってみようか」みたいなところが、311+Rnet の、ネットワーク組織の立ち上げにつながったのかなと思います。

山口：大学の「抑える」姿勢とも重なったのかもしれませんね。小林さん、いかがですか？

小林：僕は、実は最初のころ、あんまり関われてないんですよね。当時 BKC のサービスラーニングセンターで働いていました。衣笠では学生の動きが出てきて、色々動いているという話を衣笠の主事から聞いていたので、BKC もきっとあるのだろうと思って探しました。でも余り見つからず、組織立ってやっている団体は募金活動をしている 2 団体ぐらいでした。なので、余り動きがないのかなと思って、ちょっと拍子抜けしたというのが最初の頃でしたね。

柳瀬：あともう 1 つ思い出しました。3 月中盤に、京都や関西で、一度学生などの動きを取りまとめようという動きが実はあったんですよ。一元化したプラットフォームのようなものを作るから、学生団体や個人がむやみに東北に行ったり勝手に行動するのはやめてほしいと。僕はほとんど参加していなかったのですが、関西近辺の学生団体や個人が 200 団体近く参加していたようで

す。それが、思想信条の違い云々かんぬんみたいな形で、確か 2 週間ぐらいで崩壊したんですね。ああこれはまずいなと。立命にも色々やっている子たちが大勢いて、やりたいと言っている学生もたくさんいるのに情報共有できる場もないし、とりあえず共有できる場所をつくろうと思いました。福島に入られた方の報告会を撮影したものをみんなで見ながら座談会を企画したのが、立命館と初めて関わらせて頂いた時だと思います。そのあと何度かこうした機会をもったのですが、それが設立のきっかけになったんですかね。

小林：衣笠ですごく熱い学生たちが集まっているらしいという話は BKC にも聞こえてました。やっぱり頑張ってる学生はいて、集まろうとしているんだと感じましたね。

柳瀬：この時にちょうど河村さんや、栗田さんが関わってきました。栗田さんは山形出身ですが、震災のときは海外にいて、ほとんど帰ることができず立命に来てしまって、すごく悶々としていました。東京で被災した子もかなり集まったというのがこの時だったかと思います。

山口：ちなみに過去の資料から時系列で追っていくと、3 月 15 日に大学が「東北地方太平洋沖地震への災害救援活動を考えているみなさんへ」を発表しました。そして、4 月 6 日の前期セメスター開講までの時限組織として、愛称を 311+Rnet とする「立命館大学震災復興支援活動情報ネットワーク」を立ち上げよう、という話になりました。教職員と有志の学生の共同体として、です。それで、311+Rnet は現地に行けない学生らの後方支援の活動母体となり、卒業式と入学式の募金活動などを行いました。3 月 15 日の文書では勝手に募金活動するなと示したこともあり、大学内に複数の団体や個人のネットワーク組織としての活動を提案し、呼びかけを重ねて行くこととしました。もちろん、前期セメスターが始まっても事態は落ち着かず、むしろ現地の事態は深刻さを増していったように思えました。そこで、4 月 14 日に 311+Rnet の名前で「東日本大震災被災地でのボランティア活動について」という文書が大学のホームページで発表され、立命館からの支援のターニングポイントを迎えることになりました。抑える段階から妨げないというモードに変わったんです。要するに、抑えるというのは端的な言葉で言うと行くなですけども、行くなら行けばに変わったんですね。

2011 年 4 月頃のミーティングの様子

ちょうど立命館では 2020 年までの学園ビジョンを策定しているところでした。未曾有の災害とも呼ばれたこともあり、2015 年までの前半期計画の補正版において、5 つめの柱として「東日本大震災を受けた学園の基本計画」が掲げられることになりました。そうした議論の経過もあって、4 月 21 日に立命館災害復興支援室が設置されました。こうなると、後方支援も続けつつ、直接的な支援活動を妨げないどころか促すようになりました。

こうして時系列で振り返ると、佐藤先生も触れた初動期について、状況が分からない中で迷惑になるから行くな、行かせない、という判断は大組織ゆえの秩序を大事にした判断としては妥当な選択肢だったのでしょう。ただ、今だから言えることですが、「行かなくてもできることはある」と言っても、いてもたってもいられずに勝手に行く学生はいるだろうと思っていました。行くなと言われて行かないというのは、相手を見て判断していない証拠だと考えているためです。もし困っている人がいて、一緒に行きたいという人がいるなら、どうやったら行けるかを考えればいいはずが、そうはならなず、人やまちに丁寧に向き合うモードにはならなかったんですね。

今回、大規模・広域・複合型の災害に対し、被害の全容が分からない中、今行っても迷惑になるんじゃないかと、支援を抑える声が多くの場で生まれたことが大きな特徴でした。それゆえ立命館大学でも、現場のニーズに応えるために人や物やお金といった活動資源をコーディネートする中間支援組織を立ち上げ、ボランティアが活動できるようにするという手段が講じられることになりました。もっと言えば、既存の組織が直接的な支援モードに変わるのではなく、支援したい

人の受け皿として新しい組織が立ち上げられることになりました。
このように、東日本大震災では「直接的な支援をしない正当性」が高まったという特徴とあわせて、もう一つ、SNS がある程度機能したことを挙げることができます。先程も Twitter のことに触れましたが、この「ある程度」というところがポイントです。一人ひとりの命を救うところまで機能した Twitter ですが、支援したい人の思いを束ねていくには人が組織化をしていかなければなりません。インターネットは宇宙からでもアクセスができるものですが、個々の情報はミクロであり個別性が高いものです。しかし、自らのタイムラインに、そうした実に細かく具体的な各所の情報が並ぶことで、あたかも自分がコントロールルームにいるような感覚に浸り、支援しているような感じになってしまうのではないでしょうか。つまり、細かな情報を知っていれば、知った情報を誰かに伝えていくなどしていれば、自分はささやかだけど現場の何かに関わっている、そうした態度の表明になっている、支援できていると捉えてしまうのではないか、ということです。このようなツールの進化が、逆に情報収集や共有を通じて具体的なアクションが新たに起きるきっかになりにくさせたのではないか、という気がしています。だからこそ立命館大学では教職員中心に 311+Rnet の立ち上げの構想を考えたんですが、そもそもの制度設計からもっと学生が関わっていれば、もっとやりたいことができるようになったと確信しています。最初の枠組みが、すべきことだけを考えて、そして現場の動きを抑える中でつくられたことが、最後まで尾を引いたのではないか、そう評価しています。
設立のエピソード、初期の活動について、当時の状況に照らして少し言葉を添えました。今一度進行役の立場に戻り、皆さんが何か思い出した点、「そういえば…」といったお話を伺わせてください。
小林：そういえば、ですね、「すごく活動してます」と言う学生に出会ったことがあって、何してるのと具体的に聞いたら「昨日、1 日中 Twitter で情報の交通整理してました」っていうのを聞きました。これは活動なのかな、少なくともその分にかけるエネルギーとか時間を何か他にかければいいのにと思うことは多々ありましたね。何か仕組みがないと動けない、仕組みに乗ろうとする学生たち。もっとこう、ほっとけないからやる、というボランティアの原点みたいなものが余りなかったなと感じますね。ほっとけないから行くなと言っても行く学生がいたりとか、そういったことがなかったと思います。その辺はやっぱりジレンマですよね、サービスラーニングセンター職員としては。やればやるほど学生の主体性を奪ってはいないかという。
佐藤：私はむしろ SNS の話でいうと、今回、立ち上げる際に思ったのは、データ処理とか後方支援とか、こんなことが広くやられているんだなというのがむしろ新鮮だったんです。復興支援だと現地に行って、最初、泥かきからやるというイメージが強かったので、東京でいろいろ拠点を置いて支援するみたいな動きが大分ありましたけど。
山口：確かに膨大なミクロ情報の交通整理は後方支援の新しいスタイルの一つでしょう。しかし、それを同時に皆がやっていると、交通整理までミクロになってしまうわけです。今となれば、その時間がもったいなかったなどと言えるでしょう。とはいえ、それだけ必死だったんですよね。その例に漏れず、311+Rnet も Twitter と Facebook を回し、大学のドメイン内に公式ウェブサイトもつくりました。しかし、セキュリティの仕様でウェブサイトは学生がログインして更新することはできず、結果として最新の情報は Twitter と Facebook に載り、ミクロな情報として細分化さていく、という結果になりました。管理する側も運営する側も、もしかしたら利用する側も、ホームページは何のためにあるんだ、と感じたのではないでしょうか。
今、インターネットの活用の部分でネガティブな発言を重ねてしまいましたが、311+Rnet の基本は人と活動のネットワークでした。基本はアクティブでポジティブに支援していくための、知恵や経験の相乗効果を狙っていました。何かこんなことができたとか、こんなことが波及効果として生まれたなどの実感がある方はいますか？

柳瀬：そうですね、集まってよかったなって思う瞬間というのは幾つかありました。4 月ごろに、ミーティングが終わった後にみんなで大学近くの「なか卯」に御飯を食べに行って、その後、夜中 3 時ぐらいまで 10 名くらいで語り尽くした時がありました。先ほど佐藤先生もおっしゃられていた、東京と関西とそして東北との温度差をテーマにそれぞれの 3.11 当時の経験を話しました。海外を含め、それぞれの地域で向き合った 3.11 で突きつけられたものが人それぞれかなり違ってて、ひとりひとりが 3.11 で何を経験してどういうことでショックを受けて今立ち直れないでいるのかというのが、その日に大分共有されたというのはありました。
3 月、4 月のフェーズって東北に行こうと思っても大分大変だったところがありますよね。東京までだったら新幹線に乗ればすぐに行けるんですけど、関西から東北まで行くのに 10 時間ちょい、バスで揺られて、その後 2、3 日活動して、車中泊してそのまま帰ってくるかとなると、やっぱり尻込みしちゃう人も多かったですし、実際バスもほとんどなかったですし、かといって電車がちゃんと走っている時もあればみたいな感じもあったので、やっぱり関西と東北という距離的なものというのはやっぱり大きかったのかと。700 キロ、800 キロというのはやっぱり大きいなということを強く感じました。
その一方で関西からすぐに行けた人というのは、もともと何らかのつながりで、復興支援のルートが既にできていた、あるいは、つくりやすい、つながりやすい状況・環境にいた、そういう人たちが真っ先に行けたのかなと思ってます。復興支援の iBOUSAI「防災缶」のときも、防災系の研究者や学生の方たちが、たくさん来ていましたし、何か近くで動きがあるときには人が集まってたのかなという気はします。
山口：そうした役割は、平時には、ボランティアセンターが母体となって 2008 年に設置されたサービスラーニングセンターが果たすものですが、小林さんは何かエピソードがありませんか？ポジティブ、アクティブな人たちと関わる機会も多かったのではないでしょうか。
小林：いい話というほどではないけど、僕の中の気持ちの動きの話を。4 月 1 日に衣笠に異動してきて、学生がブレーキもかかってるんだけど、すごく熱い思いは昔と変わらずあるんだなと感じていました。311+Rnet をベースにしながら、僕はこの学生たちと一緒にやっていくんだろうという思いを高めていたのが 4 月前半だったんですね。ところが、災害復興支援室ができるという話が聞こえてきた。そっちのほうにいろんな学生の支援も含めて移管されていくんだろうと僕は思ったわけですよね。ところがそうではないと、大学の教職員の動きのほうは災害復興支援室が中心にやりながら、でも学生の実質的な動きを支援する仕組みとして 311+Rnet は残そうという話になっていった。それは今考えてもよかったなと思います。もちろん、災害復興支援室に一元化したよさもあったんでしょうけれども、単純に遠いんですよね。朱雀キャンパスに支援室があって、衣笠や BKC にいる学生を支援する、やっぱり難しいと思います。単純に学生がいていいんだよという場所が衣笠にも BKC にも残ったというのが、今になって思えば、それが後にエネルギーになっていきました。
山口：冒頭で佐藤先生がおっしゃられた、大学主導で何かをすることと学生の自主的な動きを支えること、この 2 つの軸は交わらない可能性があります。もちろん、大学が自主活動を支援するわけですから、入れ子の構造にはなってしまいます。ただ、大学の動きと学生の動きとでは視点が違ってくるはずです。だから、丸をどう二重丸にするか、その観点が重要となってきます。支援とはマイナスをプラスにする、0 を 1 にする、そういったことだけではありません。1 を 2 にする、あるいは 2 を 6 にする、こうして出来ていることを続ける、良い点を伸ばす、そうした発想で活動が始まり、続き、きちんと止められる、それが大事です。問題点や改善点ばかりに関心が向くように導いていくと、時に「自主活動をさせる」という論理矛盾が起きることがあります。主体性は駆り立てるものだけではなく、主体性が引き立つ土壌づくりが大切なのですが、どうしても熱意の差などが明らかになると、どこかで誰かが誰かに何かを「させる」構図が出来上がっ

てしまいます。先程はそれを秩序という言葉を使って問題提起をしたつもりです。ただ、こうして大きな流れを生み出そうとする中でも、細かな動きが立ち上がり、それが 311+Rnet の団体構成員として積極的に参加してくれたのは、大きな成果の一つでしょう。

柳瀬：3 月のフェーズと 4 月の前半のフェーズ、余り動きがなかったというか大学が休みだったのでみんな会う機会自体が余りなかったんですけど、4 月以降、「復興につなげるために僕たちもこんなことができたらいいね」みたいな話は、ちらほらあったんですよね。その中で一番やっぱり特徴的だったのは、チャリティーかき氷のらくださん。メインになってた子たちがみんな就活生でした。就活生だったんだけど、やっぱりこういう震災があった中で何かできないかなみたいな話をしてて、最終的に彼らはかき氷になったわけなんです。10 万円ちょっと売り上げましたね、売り上げて、実際に向こうでもかき氷つくられてみたいなこともされてました。

山口：ゆっくりとした歩みで砂漠を行くキャラバン隊という物語からの命名でしたね。かき氷販売と並行して、関西に県外避難されている方の学習支援などにも取り組んでいました。

柳瀬：そうでしたね。そして、彼らは本当にゼロベースから始まったんですよね。たしか、メンバーの方たちもボランティアとか、そうしたことに関わっていた経験はほとんどなかったと話していたと思います。その子たちが、「やっぱり何かできないか」ということで、マーケティング的に調べたら、かき氷が利益率がいいということに気がついて、それで結局彼らはかき氷をやって、その収益の全てを支援に使っていました。彼ら、実はここだけじゃなくて新大宮商店街のお祭や宇多野ユースホステルでのイベントなどにも出張していて、新聞を出したりと、幾つか他の活動もされていました。そういう「小さな活動でもいいから、自分たちで何かしなきゃいけないよね」と言ってやっていくというのが、大学の中じゃなく、大学外でも同時多発的に起こっていったというのが、4 月以降に増えていったイメージがあります。

チャリティーかき氷らくだの活動の様子

小林：これを最初にやった学生は、かき氷のアイデアはずっと前からあったらしいです。ただ、単純にもうかると、これは商売としてうまくいくだろうから、いつかやろうと思っていたらしい。それを実現する前に震災が起こったから、その仕組みを使ったら東北に寄付できるなと考えてやったのがらくだなんですね。

ただ、これが本当悩ましくて、最初はサービスラーニングセンターに大学の中でできないかという相談をしていたんですね。で、学生部とも相談をしていたと思うんですけれども、大学の中ではちょっと厳しいということになったそうです。

佐藤：多分、衛生上で、火が入ってないということが問題あったんだと思います。

小林：結局、彼らは自分たちで、大学の外に場所を借りてやり始めました。311+Rnet として宣伝ぐらいは手伝いましたけれども、それだけですね。けど彼らは大学の使えるところは使って、たまにイベントで大学の中でもやったりもしていました。そういうふうにして大学とつき合うときはうまくつき合って、でも大学が絡むとかえって面倒だというところは自分たちで勝手にやっていました。

柳瀬：あと、組織的には 311+Rnet のほかに、大学間で連携して復興につなげていこうという「エンカレッジ」という動きもあったような気がします。けれど、大学同士で連携しようという動きだったりとか、あるいは学生団体同士で東北と連携しようというような、団体間での連携の動きは、距離的に離れすぎていたこともあって、ほとんどうまくいかなかったような気がするんです。ただ、個人ベースでつながりをつくって、それで東北学院大学と Skype でつないだりだったりとか、渥美くんが向こうでインタビューして、それを何かの場所でアート作品みたいな形で提示し

たりだったりとか、個人ベースのつながりというのは、実はいろんなところで生きてはいてて、初期の段階では人と人とのつながりみたいな部分というのが、なかなか連絡するのも大変なんですけれども、弱いながらにもきちんとつながっていて、実はすごく有効だったなというのは感じたところでした。

山口：東日本大震災と阪神・淡路大震災とを比べると、まずは被災 3 県と言われるように広域災害という点が最も大きい違いです。当然、大規模な災害であるという点では参考になることも多いでしょう。ただ、地震と津波と原子力災害、その他液状化など、複合型の災害となったために、単純比較が難しい要因となりました。それもあって、東北の支援は総合化しなければと考える人が多かったのかもしれません。つまり「これもできてないじゃないか！」と言う人が増えれば増えるほど、重箱の隅をつついていく感じになっていきます。だから、何かに特化する、例えばかき氷を売るのだと、非常にわかりやすく、結果として活動を始めやすく、続けやすく、止めやすいものとなるでしょう。しかも、その結果をどう活かすかは後で考えようと言いやすいでしょう。しかし「東北を支援をします」となると、なかなか簡単にはいきません。「まずはみんなで支援をしよう」、「団体をつくろう」などとなると、「代表はどうする？」と誰かが問い、それに「代表とかはいいからみんなで考えましょう」という流れが生まれることがあります。この「みんなで」というのが厄介なんですね。みんなで考えるという名のもとに誰も決めない、でも議論だけは深まってきて、もう時間が次バイトがあるのでというのでまた去って行って、中途半端なまま終わる。じゃ、また今度 Skype でやろうという具合に、当面の動きが先送りされます。これら便利そうなツールは、時に相手の存在を見えなくさせてしまいます。決めつけはできませんが、大学同士の連携がうまくいかないことも、ツール重視の落とし穴にはまったのではないでしょうか。何かしていることやアクティブであるという自分の状況に満足する、言い換えれば結果に満足せず状況に満足してまったのではないか、と。またネガティブな話になってしまいましたが、直面した困難、問題に対して、これが成果だと言える方はいらっしゃいますか？

佐藤：個別のいろんな動きをここの Facebook なりのところで寄せ集めて、動きをちゃんと形にしたというか、表に出したというところは最初の成果だと思います。

小林：まあ、組織として何ができたかと言われるとちょっとつらいんですけれども、何かしたいと思っている学生に場所を提供するとか、ちょっと後押しをするだけで実現するみたいなことは結構あったんじゃないかなと思っています。僕、思い出したのは「ミートソース」という団体があって、最初、代表の学生が動画をつくって流すか何か、そんな取り組みをすると聞きました。けど、言っちゃ何ですけどだめなんですよね。思いだけはしっかりあるけど、それを伝えるための仕掛けが考えられていない。そこで、柳瀬くんや 311+Rnet で中核にいた学生がこうやったらいいとアドバイスして、団体名も後から決まったんですよ、団体名がないと宣伝できないじゃないかと言ってね。そんなのって 311+Rnet があったからこそで、多分それがなかったら彼は 1 人でやって、それこそ場所のとり方もわからなくて、エネルギーを使って終わってしまったと思うんです。311+Rnet という仕組みがあったことで、こうやって場所とったらいいんだとか、こういうふうにやっていったらいいんだということが分かって、実現までいったということが他にもいっぱいありました。本当に 1 年目というのは山ほどイベントをやっていて、311+Rnet があったから、人と人がつながったからできたことは多かったなと思います。

山口：個人名は差し控えますが、その後、彼は私の講義を受講していて、最終レポートにそうしたことを自分の言葉で記していました。今でこそ気付いているようですが、多分当時はうまく言葉に出来ず、しかし何かしたいという思いは確かにあり、もやもやが募ったでしょうね。

柳瀬：みんなもやもやしていましたね、この時は。もやもやしてる段階でいろんな情報が入ってきていました。その時、やっぱり現地にさっと行って、そこで常駐なり何なりして、ちょっとコーディネートできる人間が 1 人いるだけで全然違ってたなと思います。

山口：311+Rnet は後方支援という枠組みと名前にこだわって活動していました。行かなくてもできることがある、これはもちろん間違っていません。しかし、それが自らを縛る制約条件となり、理念に対する価値や意味の追求がしきれなかったのではないかと感じるときがありました。
柳瀬：こだわっていたわけでは全然ないんですけれども、現実問題として 4 月から大学が始まってしまっていて行けなかったというのが、まず第一にあるのかなという部分は大きかったかなと思います。
山口：実は現地と事務局の温度差の問題は、阪神・淡路大震災の際の「立命館大学ボランティア情報交流センター」でも明らかとなった問題で、後に立命館大学が放送局が二つの立場の葛藤を映像作品としてまとめています。嫌な言い方をすると、後方支援のこだわりは、現地に行かないことを合理化、正当化するロジックにも受けとめらます。これは教職員側が現地に行くことを「抑える」時期には、実に都合良く位置づけられます。しかし、現地に行くなというメッセージではないはずで、現場で支援活動にあたる人たちとの温度差を生みます。
柳瀬：そうですね。ただ、行ってた子は多かったし、個人だったりとか団体としては行っていて、4 月、5 月になってくると復興支援バスだったりとかも出てきていました。僕らはバスを出す手段も何もないし、その時点での学生の制約条件からすると、つなぐことというのがまず優先的に求められたみたいな部分というのはあるのかなとは思います。
小林：改めて考えてみると、ちょっとだけ関わっていた学生は別として、中心になってやっていた学生は現地へ行った学生がほとんどなんですよね。行って感じたことをこっちでも実現したい。で、こっちでできることを考えてやったというパターンは結構あると。そのときには 311+Rnet というものが便利な道具になったのかなとは思いますね。
高橋：今後、例えば南海トラフが起こると言われている中で、また同じような学生の動きがあるのではと思っていますが、学生だけの組織の方がよいのか、どういう形が本当はよいのかが、まだ自分の中で答えが見つからず分からないです。今後も東日本大震災のような大きな災害が起こった時に、どうすればよいのかを職員の立場からの思いや、学生の思い、またもっとこうしたかった等、当時の学生に携わっていた方々に振り返ってみて本当はどうだったのかをお聞きしてみたいです。
山口：では、時間をぐっと現在に引き寄せましょう。特に清水くん、河村さん、いかがですか？

Rnet の活動を振り返って

清水：さっきちょうどおっしゃられた、行かない理由を合理化するというところに関連して、ちょうど 1 コ下、2 コ下の 311+Rnet 事務局メンバーは実は全然行ってない子たちばっかりだったんですね。本当に最後活動終了する直前にやっと東北に行ったぐらいで、やっぱり現地を知らない、行ったことがないという点で現地のニーズを分かっていなかったり、モチベーションの差であったりしたと思います。僕らが学園祭でこういうのやろうと言ったら言われたことはするんですが、自分から何かをやろうともしないし、自分で情報を集めたり発信することもしないというところで、だんだんと代がかわるにつれてその子たちのモチベーションが下がってきて、人が減っていって 311+Rnet の活動が終了することの原因の 1 つになったのかなというのは僕自身は感じてますね。
河村：311+Rnet としての活動の意味が見出せなくなったというのが一番大きいのかなと私は思っています。大学側からも「今までのような大学側の支援の形は終了にする」という話をされたりとか。あとは、今、清水くんが言ってくれたみたいに、メンバーの中での意識というのも変わってきたりと、本当にこの状態で存続していく意味があるのかというところを確認した上での終了という決断を出しました。
山口：案外難しいんですよね。対外的な文書には当初の役割を終えて、などと書かれるのですが、

当初の役割が何でどう終えたのでしょうか。役割を終えたというとき、果たせないから終わる場合と達成したから終わる場合の両方があります。今の話、清水くん、河村さんの話でいうと、このままやっていっても当初の目的を達成し得ないから役割を終え、幕を引くという決断に同意するということだと思うんです。終了に寄せての思い、それぞれいかがでしょうか。

柳瀬：最初、津波にさらわれてしまってそこからフェーズからどんどん復興も進んでいってフェーズって変わってきたのかなというのは思ってます。ある意味では自然な動きの一つなのかなとは個人的には思います。

小林：僕自身すごく反省があるんですよね。僕が 2 年間かかわった中で、最初の 1 年は比較的上手くいったのではないかなと思っていて、とにかくいろんな学生がやってきてこれをしたいと要望がありました。それを、じゃあこうやってできるよと言ってやるだけで、ぽんぽんぽんと後押しするだけでいろんな活動が生まれていました。成果を問われるとちょっと怪しいですけれども、少なくとも学生がやりたいと言ったことを形にするお手伝いはできたかなと思っています。

ただそこからモードチェンジしないといけなかった。震災から 1 年ぐらい経ってくるとだんだん何をしていいかみんな分からない状態になってくるわけですよね。だから学生が来るのを待っていても誰も来なくなる。そこで、我々は何のために、具体的に何をするのかをもう一回しっかり考え直す、そういうモードチェンジをするべきでした。震災直後のモードでずっと 2 年目もやっていって、うまくいかなかったことが反省としてありますね。けれど、本当に 3 年間よく続いたなと思います。さっき話も出ましたけれども、いろんな学生のネットワークが山ほど出てきて、ほとんどすぐなくなりましたよね。そんな中で 3 年間続いた理由は何だろうと考えると、事務局がしっかりしていたというのが大きかったと思います。実際にネットワークを継続していくための要は事務局ですよね。例えば会議の日程を調整するとか、書類をつくって記録をまとめていくとか、そういう地味な作業をしてくれる学生がいたのは大きかった。だから 3 年続いたし、それなりの成果もあり、価値を生み出せたのかなとは思っています。

だから今後こうしたネットワーク団体をつくるのなら、事務局がしっかりした組織をつくるのが大切ですし、そうなってくると 311+Rnet の学生と教職員が一緒にやる仕組みはよかったんじゃないかなと思っています。なかなか学生だけで事務局として維持するのは難しく、教職員が関わっていたから安定してできる部分もあるし、学生だからできる部分もある。それぞれの強みを比較的うまく発揮できた仕組みであったのかなとは思います。

山口：話し過ぎる進行役で恥ずかしいのですが、私も少しだけコメントさせていただくと、311+Rnet の活動終了は、希望していたことが通らずやめるという背景があるように思うんです。最初は緊急時ということもあって、とにかく何かすることが大事であり、出入り自由なコミュニティが必要でした。入りが多いから出も多いのですが、それが活動へのダイナミックスとなって、組織に広がりがもたらされました。しかし、だんだん落ちついてきたら出入り不自由な環境が必然となります。単にノリで関わるだけでは支援にならないからです。それが組織化という言葉に置き換えられます。私は神戸での活動を経て社会心理学に専門を変えたので、柳瀬くんに「最低限のルールはつくろう」とよく言いました。「何をしたらあかんのか」を決めよう、と。ミーティングを無断欠席しないとか、定例ミーティングの開催通知や議題整理や議事録共有の方法など、ちゃんと決めておいたら、罰則じゃなく自分たちが大事にすべき価値として組織として大事にする価値、コアバリューとなるよ、といった話をしたことをよく覚えています。

定例ミーティングの様子

もう一つ、役職と役割を混同しないでねと何度も言いました。学生団体だけでなく組織に共通する点ですが、どうしても「代表」など役職名にこだわるんです。そういうふうな役職にこだわっ

て誰かに役を振っていくと、結局その役職が何か分かっていない中でとりあえずやる、といった前提で組織が動くことになります。組織化というのはどこかで機能分化させていくことなのですが、ただ役職名を誰かに与えただけでは、何をしていったらいいのか、うまく動けない時に何が困るのかが分からぬままに時間が流れていくわけです。役職がどうじゃなくて、一人一人に何ができるのか、全体の動きで何が求められるのか、全員が同じ役回りではなく、どんな役割が必要なのか、これが役職と役割を区別するということです。しかし、なかなかそうもいかず「みんなで」といった漫然としたルールのもとで動くことになり、端から見て組織化できずじまいでした。

今後こうしたネットワークをつくるとしたら

柳瀬：終了について、何ができたのかと言われると自分自身も苦しいところではありますし、「もっとこうできたんじゃないか」というのはすごくあります。今後、南海トラフや首都圏直下型地震など、起こるであろうと言われていますし、そうした大地震よりも前に、今も毎年毎年大雨で関西各地でもとんでもないことになっていて、こうした部分も、どう支援できるか、立命館はどうするのかみたいなところも含めて考えていかないといけないなと思います。
災害が起きると、交通機関等も全部とまってしまってみんな動けなくなる、という状態に現実問題として、支援をどうするかということと共に自分たちもどうするんだということも一人一人が考えていく必要があるのかなと思いました。
南海トラフなどの大災害に関しては、どう支援体制をつくっていったらいいのかというのはもちろんあると思うんですけれども、もう既に研究室や他の活動などで地域同士でかかわりがあると思っています。地域のつながりを一から構築しようと思うと大変なわけですけれども、もともとつながりがある部分に関しては公的なものと違って割と入りやすかったりすると思うんです。何か起きた時、現地の人達、団体が中心となってやっていると思うので、そういうところにアクセスしながら一緒にやっていけるかという部分というのは、実はそれまでにその地域とかかわってきたかが大きいと思います。立命館は様々な地域と関わりを持っている人が多いと思うので、そういうつながりを大事にするべきだと思いました。
今後つくるのであれば、そうしたつながりを生かし、仕組み化しながら、支援を行えるようなことが出来るといいのではないかなと思っています。
佐藤：大学の立場でいうと、学生部はボランティアなり、東北への支援なりのような、正課にとどまらない、あるいは正課から派生した自主的な学びを援助する枠組みを作るべきだと考えていました。そのため、育英型の奨学金や助成金の制度を立ち上げたばかりでしたが、震災被害への様々な支援もこの制度を利用した取り組みが多くみられることになりました。311+Rnet の活動は、学生部の考えていたこのような枠組みの典型例だったかなというふうに思っています。
この 311+Rnet の今後に関して言うと、学生の横のつながり、どんなテーマでもいいので、それぞれ元気にやりたいと思っている人たちが横につながれる場だけでもあった方がいいんじゃないかなという思いは持っています。それが即、次の南海トラフのところに反映するかどうかはわかりませんが。学生部で見ていても元気な学生はたくさんいて、育英型の奨学金や助成金を出している学生たちに 1 年終わった後、プレゼンテーションをしてもらっているのですが、非常に多様なそして多面的に学んでいることを話してくれるんですよ。けれど、こういうふうな活動をして頑張っている学生がいるんだということを他の人（学生も教職員も）が知らないという、それがもったいないなというふうに思っています。これだけの大学でこれだけの学生がいてこれだけいろんな動きをやっているので、それがお互いに見えればいいなという願望はあります。
山口：今後のネットワーク団体をつくるとしたら、あるいは南海トラフでの活動を想定するなら、一番大事なのはオフィシャルな機関の存在でしょう。たとえ一時的な組織であっても、公式の窓口があることは、外部から立命館を頼りたい、立命館を支援したい、そうしたときに断らなくて

済む可能性が高くなるからです。だからこそ、発災時のために平時から多様な立場の人々が一緒に考えることが必要でしょう。実際、東日本大震災の発災当初、部署や関心を越えて一緒に考える人が集いました。その時に体制や予算があるかないかではなく、支援を求める呼びかけに応え続けていくためには、日頃からある程度の準備と余裕を持っていくことが必要です。それがあって、緊急時に物事の優先順位を調整しつつ、他者の思いを受けとめ、共に考える場をきちんと生み出し続けることができるでしょう。南海トラフが動いたときは私たちが被災者になる可能性が高いわけです。まず手の届く範囲でどう身を守るかも大事なんですが、それ以上に東日本大震災の支援を通じて「お世話になったから恩返しを」というような声や、「あのときは立命館が頑張っていた」と思いを寄せてくださる人たちの気持ちをきちんと受けとめる「受援力」が求められます。そのためのオフィシャルな窓口機能をどう整えられるか、常に考えていたいですね。

次の世代へバトンを託す

小林：立命館、大学の中では結構元気な学生が多い大学だと思っていますけれども、僕はその中でも特に元気な学生を相手にする仕事だったんですね。

でもその先に見ていた学生はそうではない。むしろ本当に元気な学生は勝手にやるんですよ。そうじゃない学生がいかに動ける仕組みをつくるかというのが 311+Rnet の一つの課題だったと思います。それはみんな一つにというだけじゃなくて、元気な学生は元気な学生、普通の学生は普通の学生の役割があって、それで活動を進めていけたらなと思います。僕も立命を退職して物理的には離れていても、どこかでつながっている感覚はあって、僕にできる役割を担っていきたいなと思っていますので、これからもよろしくお願いします。

柳瀬：今言えるのは、やっぱり「現場主義第一であるべきだ」というのがベースとしてあります。現地の人と 2､3 日一緒にいるようなことがあるだけで全然違っただろうなというのがこの震災支援で外部とのネットワーク組織が最初の段階でつくれなかったことに対しての一番の後悔です。「今後こうしたネットワーク団体をつくるとしたら、あるいは、震災対策として、どことどこの地域が、どのように地域連携をとりながらやっていくのか」ということに関しては、まだモデルのようなものがきちんとは示されてはいないと思うので、そのこと自体は、自分の危機意識、問題意識としてあります。

また、その一方でそれぞれの地域が自分たちでやっていけるような方策を模索していくべきだと思うし、そういう小さな地域主義プラス外からの人たちとの連携の上で何か減災なり防災なり、これからのまちづくりをやっていけるのではないかというのを 3.11 から 3 年ちょっとたった東北の動きを見ながら、思っています。

小林：SNS が普及した時代だから情報はとれるんですよね、現地に行かなくても、人に会わなくても、書類は書けるんですよ。ただそれだけでは足りなくて、やっぱり現地に行って人に会わないと感覚が起動しないんですよね。実際に現地に行けるかと言われたら難しいのですが、やっぱり行かなきゃならんなと強く感じています。

もう一つだけすみません。阪神・淡路大震災の時に学生だった人たちというのは今 30 代後半ぐらいなんですけれども、現在 NPO 業界とかで若手のリーダーとして活躍している人が多い。山口先生も実はその一人ですよね。同じように東日本大震災のときに学生だった世代が NPO のリーダーになる、あるいは別の活躍の仕方で、日本を引っ張っていく世代になるんだろうなと期待しています。

山口：長時間にわたって秘話を語っていただきました。ありがとうございました。

(2)311+Rnet を振り返る～活動終了にあたって～

【お詫び】本章に関しまして、当初関係者の方に集まっていただき座談会の第二部を開催し、音声を録らせていただきました。しかしながら、不手際により採録ができなくなり、再度 Q&A の方式で言葉を寄せていただくことになりました。関係者の皆様には、多大なご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。重ねてのご協力に感謝申しあげます。

回答者

竹市 早織……. 元 311+Rnet メンバー、立命館大学文学部 3 回生
齋藤 怜……. いのちのつどい 2013 学生自主企画運営メンバー、立命館大学産業社会学部 3 回生
庄司 拓哉……. Investor、立命館大学文学部 3 回生
北川 真理子…. 立命館災害復興支援室

――311+Rnet に関わったきっかけは何ですか。

竹市：大学に入ってアルバイトやサークルもしつつ、できるボランティアを探している時に出会った Rnet が、関西でできて一番自分に向いている団体だと思ったから。

齋藤：2013 年 3 月 11 日に開催された追悼企画「いのちのつどい」に参加し、学生交流企画の運営にあたりました。この企画では 1 日を通して、多くの方が様々な形で復興に取り組んでいることを知りました。私自身、福島県いわき市で被災し、その経験から東日本大震災に関する活動に参加できないかと、入学後考えていました。Rnet さんとの活動は、その後の活動につながる一歩になったと感じています。

庄司：インベスターに所属して入る時にボラフェスに参加させていただいた時です。

北川：東日本大震災に関する学園の部署として、2011 年 4 月に設置された災害復興支援室に、同年の 7 月から着任しました。学生を対象にした取り組みや、学生に協力をお願いしたい外部からのご依頼などがあった場合に、事務局のみなさんに連絡、相談させていただいたり、一緒に取り組みを行ったりしてきました。

――あなたに（あなたの団体に）とって 311+Rnet はどういう団体でしたか。

竹市：様々なボランティアの実情、意義を知り、考えることができたのが一番大きかった。
また、震災の脅威を改めて知ったり、企画の手順を学んだりと、今までに知らなかったことを経験した。

齋藤：私とボランティア団体というつながりだけでなく、大学とのつながりももたせてくれた団体だったように思います。先に述べた、私が参加した企画が大学主催のものだったということもあり、災害復興支援室の職員の方とも一緒になって企画を考えました。その際に、複数のボランティアサークルの情報を得ることに加え、災害復興支援室の活動についてもよく知ることができました。これをきっかけに、災害復興支援室の活動にも参加させていただき、団体に属さず個人で考えて活動するようになりました。また、復興に向けた活動をしている Rnet の存在自体が、被災者としてはありがたく、また、私自身の活動についての心の支えでした。

庄司：学内のイベント（ボラフェスや学祭など）でブースなどやらせてもらい活動の幅を広げてくれたことと他団体との交流もさせてくれた団体です。

――311+Rnet の活動内容・体制等に関して、改善点があれば教えてください。

竹市：現地の方との繋がりがもっとあって、どのような活動が求められているか知れたらいいと思った。ネットワーク団体としてもう少し協力して活動できたらよかったと思った。

齋藤：特にありませんが、Rnet の活動終了が、震災の風化に繋がっていくことのないよう、私自身もしっかりと被災地の現状を発信するといった活動をしていきたいです。
庄司：ネットワークという難しいポジションではあったと思いますが、Rnet としてツアーをしたりなどのメインとなる活動があっても良かったのかと思います。
北川：年間の計画を決めて、学生をまきこみながら取り組みを進めていくという動きも重要ですが、何か国内で災害が起こったときなど、緊急ですばやく動く必要ができたとき、動くことが出来るような体制や、使える予算などがあれば、より活動が発展する余地があったかもしれないと思います。災害復興支援室には、学生の皆さんに使っていただける予算は比較的あったのですが、学生のみなさん主体での企画提案や、学生で事業をしますので予算をください、というお願いなどは、支援室まで届くパターンがなかったので、そういう動きがあれば、また違った発展があったかもと思います。

――今後どのように、東日本大震災の復興支援に携わっていくご予定ですか。
竹市：復興支援活動ときちんと言えるものに参加する機会はなかなかないと思いますが、友人と東北旅行を計画するなどして、Rnet での経験を活かしつつ、当時のこと、復興状況を伝えられればと思います。
齋藤：東日本大震災における被災者でもあることから、被災者として復興支援にどう応じていくか、また適切な復興支援を受けるためにどうすべきかを考えてきました。まず何よりも、被災状況や被災者の実態や思いを積極的に伝え続けることが必要であると考えます。震災による原発事故や放射能問題が絡む部分については、私自身の心の痛みを伴う作業でもありますが、それを避けて真の復興はないとも思い、継続して情報を発信していきたいです。
庄司：震災から 4 年目になり、もっともっと風化は進んでいくと思います。その中で団体として少しでも東北を思い出す機会を作っていきたいと思います。
北川：立命館では、ひきつづき災害復興支援室を学内に設置しながら、東日本大震災や、その他の国内災害への対応や、海外との防災に関る教訓の共有などをテーマに活動を継続していきます。震災以降、被災地域とのご縁が複数生まれていますので、それらの地域に学生や教員を派遣したり、つないだり、現地と連携することを通じて、復興に貢献していく予定です。

(3)311+Rnet の活動一覧

【2011 年度】

日にち	活動名	内容	備考
3/18	「立命館大学震災支援活動情報ネットワーク」(311+Rnet)の立ち上げ	大学 HP より 311+Rnet 設置の発表。現地に「行けない」学生たちの「身の置き所」として(部屋と専用電話を付与)複数団体・個人のネットワーク組織として、募金活動等を展開(卒業式・入学式など)。	
4/14	311+Rnet として「東日本大震災被災地でのボランティア活動について」を発表	相談窓口の提供、情報収集先の提示、組織的な活動への誘導、選択肢の提示、保険について立命館大学 HP より発表した。	
4/27	震災支援活動報告会「テレビでは分からない　被災地の現在（いま）と未来（これから）」	いち早く現地で活動してきた学生による活動報告会を行った。当日は、衣笠と BKC をつないで行った。	企画運営
6～7 月	かき氷　らくだ	学生がつくるチャリティカキ氷「らくだ」の広報協力等を行った。衣笠キャンパスの東門出てすぐのところに出店し、1 食 100 円で販売した。収益は全額寄付。	企画運営
6/6	311+Rnet CAFE EVENT	常設展示で使用する日本地図のペインティング、ワールドカフェの実施。学生や教職員など震災支援に関わりたい人々約 20 名が集まり、震災についてや復興支援についての意見交換、交流会を実施。	企画運営
6/6～ 2013/3/31	311+Rnet 常設スペース	日常のふとした瞬間に 3.11 のことを考えてもらいたいという思いから、大学内サブウェイに展示スペースを設置。「肉声展」宮城県在住者の写真やインタビュー音声等の展示。	企画運営
6/13	東北に耳を傾ける（東北学院大学×立命館大学　skype 交流会）	東北学院大ボランティア団体や現地の人との交流。東北学院大学の学生 8 名と立命館大学の学生約 20 名とが skype を通して情報交換。被災地での活動報告や大学間の連携について意見を交わす。	企画運営
6/27～7/1	311+Rnet×ミンナ DE カオウヤ「カオウヤ京都プロジェクト」	津波被害により、もともと小さな販売ネットワークしか持っていなかった福祉事業所の、売り先がなくなってしまった商品を買い取り、都市部で販売して被災地の障害者の生活を支えるプロジェクト。5 日間で 44 万 5100 円を売り上げた。	広報協力
7/5	チャリティーフリマ「みんなの思いを被災地へ」	産業社会学部の松田ゼミとの共同企画。立命館大学衣笠キャンパス中央広場にて、チャリティーフリーマーケットを開催した。学生による出店だけでなく、かき氷「らくだ」やカレー部など、11 の団体がフリーマーケットを盛り上げた。この日集まった義援金 56,283 円は大学を通して、日本赤十字社に寄付された。	広報協力
7/6	生協夏祭り	“組合員の交流”と“東日本大震災の復興支援”がテーマの立命館大学生協学生委員会が主催する「生協夏祭り」の広報協力を行った。	広報協力
7/7	Youth for 3.11 関西準備会	立命館大学の学生による現地ボランティア報告会をはじめ、Youth for 3.11 関西支部の設立経緯など、今後の支援の在り方について参加者と共に考えるイベントを実施。	企画運営
7/11	7.11 キャンドルナイト	震災から 4 カ月を迎え、様々な方から寄付でいただいたキャンドル約 400 個を一斉に灯し、3 月 11 日に起きたことへの祈りを捧げた。また現地での活動体験報告や東北人によるお国自慢等も実施。	企画運営
7/15	eat＆talk 東北！　東北の郷土料理を食べながら、東北について話す会	山形の郷土料理である「芋煮」を食べながら、東北についての紹介や、東日本大震災における被災地での支援活動を行った学生の話を共有した。	企画運営

7/15～21	被災地に行った立命生に続け！震災ボランティア＆立命活動団体紹介ムービー上映会	夏季休暇へ向けて、震災ボランティアへの啓発活動を目的に震災ボランティア＆立命震災支援団体の活動紹介ムービーを上映した。またメンバー募集も実施。	広報協力
10/2	福祉ボランティア社協フェスタ	社会福祉法人京都市社会福祉協議会が主催している「福祉ボランティア・社協フェスタ」にてブース出展を行った。	ブース出展
10/12、17、19	311+Rnet 新メンバー募集説明会	311+Rnet 事務局メンバー募集を行った。	企画運営
10/22～23	立命館アジア太平洋大学（APU）学園祭	東北の様子を写した写真や動画等の展示、東北の缶詰販売、ワールドカフェ形式での討論会、東北名物である芋煮の無償提供。	ブース出展
10/22	ENCOURAGE 日本！公開イベント	学生有志団体 ENCOURAGE 日本！が主催する「Action for Japan！～今、関西人にできる事。～」の広報協力を行った。	広報協力
10/29	オール立命館校友大会 in 京都	立命館大学校友会が毎年開催しているオール立命館校友大会。今年度は京都で行われ、311＋Rnet も IVUSA、RitsBLOH と共同で展示ブースを出展した。	ブース出展
11/5～6	BKC 学園祭「FROM3.11 ～ to peace」	震災の状況や支援活動情報の展示、メッセージを収めた写真を用いて 311+Rnet の文字を作るメッセージパネルを作成した。	ブース出展
11/12～13	衣笠学園祭「FROM 3.11 ～to relationship ～」「おいでよ！道の駅東北」	震災発生時からの東北の様子や震災の概要についての展示。フリーマーケットでの復興支援グッズの販売	ブース出展
11/17～3/1	寺子屋らくだ	2011 年 6 月～7 月頃にチャリティかき氷を販売していた活動から、震災の影響で関西へ避難してきた子どもたちの学習支援や生活支援などを行う活動に展開された「らくだ」の広報協力を行った。	広報等協力
11/27	東北こども会 あつまれ！こども稲荷散策隊	東日本大震災で京都に避難しているこどもたちを対象に活動を行っている東北こども会の活動にメンバーが参加した。	メンバーの参加
12/5～23	東日本大震災写真展「みちのく photo caravan ～東北のキセキ～」	びわこ・くさつキャンパスにて行われた「みちのく photo caravan～東北のキセキ～」の広報協力を行った。	広報協力
12/10	和歌山大学 訪問	2011 年 9 月に台風 12 号の豪雨災害があった際に精力的に活動された和歌山大学へ訪問し、交流した。	企画運営
12/11	みなくさまつり ～南草津から被災地へ～	びわこ・くさつキャンパスにて行った震災支援活動、学園祭企画についての報告。また、関西あるいは大学でもできる震災支援活動についての発表を行った。	メンバーの参加
12/17	環びわこ大学地域交流フェスタ 2011「市民と連携する大学と地域の協働のカタチ」	びわこ・くさつキャンパスにて行った震災支援活動、学園祭企画についての報告等、ブースを出展した。	ブース出展
12/17	東北こども会 クリスマス会@龍谷大学	11 月と同様、東日本大震災で京都に避難しているこどもたちを対象に活動を行っている東北こども会の活動にメンバーが参加した。	メンバーの参加
12/24	世界クリスマスツリー選手権	大阪梅田キャンパスがある大阪富国生命ビルにて行われる世界クリスマスツリー市民選手権 2011 に参加した。311＋Rnet では、宮城県気仙沼市小原木でつくられている、「小原木タコちゃん」をテーマに飾り付けを行った。	メンバーの参加
2012/1/11	「Candle Rits for TOHOKU」～1.11 今支援の灯りを再びともす～	ボランティア活動報告会、「大島写真教室」写真展＆トーク、ドキュメンタリー映画「真珠の首飾り」上映、これからの支援活動に関するワールドカフェ形式での討論会を実施。	企画運営

1/14～15	東日本大震災復興支援　学生ボランティア団体パワーアップセミナー	京都文教大学主催のセミナーにメンバーが参加。	メンバーの参加
1/16	R マークプロモーションコンテスト	第 4 回 R マークプロモーションコンテストに 311＋Rne はみんなで広げよう！復興支援の輪部門に「ウルトラメッセージプロジェクト -ultRa Messeage Project」という企画を応募。	コンペへの応募
2/4	あつまっぺ！実行委員会　会議参加	東日本大震災の影響から京都に避難してきている方の支援を行っている団体「あつまっぺ！実行委員会」の会議に参加。	メンバーの参加
2/11	2.11 東北支援サミット in 京都	京都でできる事を考える会が主催の「2,11 東北支援サミット in 京都」を 311+Rnet のウェブページ等で広報協力を行った。	広報協力
2/18	冬の京都へようこそ！ 京都・東映太秦映画村で遊ぼう！	近畿ろうきん主催の近畿圏 NPO 支援センターと協働で開催された、“冬の京都へようこそ！ 東映太秦映画村で遊ぼう！”(被災避難者応援企画)にメンバーがボランティアスタッフとして参加しました。	メンバーの参加
2/26	JASP 京都　全国たすきリレー	JASP の取り組みである、全国たすきリレーの広報協力を行った。	広報協力
2/27	JASP 滋賀　全国たすきリレー	JASP の取り組みである、全国たすきリレーの運営協力。全都道府県をたすきリレーでつなぐ企画の滋賀での協力をした。学生が、琵琶湖の一部をリレー形式で走った。	運営協力
3/2	学内団体ネットワーク会	311＋Rnet に関わっている団体が集まり、ネットワークとして今後どのように活動していくかを話し合った。	企画運営
3/4	From3.11 プレ・学生未来フォーラム	NPO 法人生涯学習サポート兵庫、兵庫県企画県民部県民文化局青少年課、公益財団法人兵庫県青少年本部が主催の「From3.11 プレ・学生未来フォーラム」の広報協力を行った。	広報協力
3/11	KISP vol.4 Spring event –Pray for TOHOKU-	第 4 回 KISP にイベントのスタッフとしてメンバーが参加し、またブース出展も行った。復興支援に向けたチャリティーイベントとして開催された。	ブース出展
3/18	東日本復興チャリティイベント～応援の気持ちを、東北に～	東日本復興支援団体 PLUSα が主催の「東日本復興チャリティイベント～応援の気持ちを、東北に～」の広報協力を行った。	広報協力
3/27	東北こども会　春のわいわい遠足	11 月、12 月と同様、東日本大震災で京都に避難しているこどもたちを対象に活動を行っている東北こども会の活動にメンバーが参加した。	メンバーの参加

【2012 年度】

日にち	活動名		備考
5/10、11	311+Rnet 合同説明会～東北の笑顔のためにあなたにできることは？～	311+Rnet のネットワーク団体と共に、合同説明会を開催した。	企画運営
6/18～22	「ミンナ DE カオウヤ」プロジェクト　～ええぇもん買って被災地支援～今、私たちだからこそできることがある！	津波被害により売り先がなくなった福祉事業所の商品を買い取り、都市部で販売することで被災した福祉施設の経営、障害者の生活を支えようという取り組み。立命館大学衣笠・BKC 両キャンパスにて実施。5 日間で合計 31 万 1050 円売り上げた。	企画運営
7/3	Let’s Start Volunteer!	サービスラーニングセンター学生コーディネーターBKC が主催しているボランティアガイダンス「Let's Start Volunteer!」の企画にてブースを出展。活動紹介及びメンバー募集を行った。	ブース出展
10/14	福祉ボランティア・社協フェスタ	昨年度に引き続き、社会福祉法人京都市社会福祉協議会が主催している「福祉ボランティア・社協フェスタ」にてブース出展を行った。	ブース出展

10/27～28	立命館アジア太平洋大学学園祭(天空祭)	カオウヤ、写真展、メッセージ灯篭、活動紹介を行った。	企画運営
11/10～11	立命館大のボランティア団体合同企画「311 世代の咆哮～合同展示会～」	活動報告、写真展、灯篭メッセージ、黙とうを行った。	企画運営
11/26	Let's Start Volunteer!	サービスラーニングセンター学生コーディネーターBKCが主催しているボランティアガイダンス「Let's Start Volunteer!」にてブースを出展。活動紹介及びメンバー募集を行った。	ブース出展
2013/3/11	Re:3.11　繋げたい一歩､広げたい絆　～私たちにできること～	復興支援に携わる学生による活動報告､グループに分かれてのフリートークを行った。	企画運営

【2013 年度】

日にち	活動名		備考
5/9、10	311+Rnet 合同説明会	311+Rnet のネットワーク団体と共に、合同説明会を開催した。	企画運営
5/25	「つながろう向島！親子で交流ボーリング大会」	震災後に福島県から向島（伏見区）に避難して来られた方々との交流を目的としたイベントで､参加募集の広報や当日の運営補助などを行った。	メンバーの参加
10/12	自主勉強会	防災・減災知識の獲得を目的とした勉強会を企画・実施。避難グッズチェックリストを作成し学園祭で配布した。	企画運営
11/9～11/10	衣笠学園祭展示企画「身につけよう防災力！」	「身につけよう防災力！」団体活動紹介､防災グッズ展示､避難グッズチェックリストの配布、東北の写真展を行った。	企画運営
2014/2/28～3/3	宮城学習旅行	震災から 2 年が経過し、メンバー間で「被災地の現在」を自分たちの眼で知りたいという意見が共有されたため､宮城県石巻市を中心に訪問活動を実施した｡仮設住宅で生活されている家庭への訪問や語り部タクシーの利用をした。	企画運営
3/11	いのちのつどい	立命館ミュージックビデオ「I love you &I need you ふくしま」に出演のほか､当日はマミーすいとんを味わいながら､思いを寄せた。	メンバーの参加
3/31	311+Rnet 活動終了	2014/6/11 に 311+Rnet の HP にて活動終了を発表	

第３章　活動終了に寄せて

(1)メッセージ

311+Rnet は、歴代の 311+Rnet 所属メンバーやネットワーク団体、また企画を通じて関わった学生、教職員等、多くの方が関わり・支えていただきながら活動を進めてきた。全ての方をご紹介することはできなかったが、一部の方にそれぞれの立場から「私と 311+Rnet」というテーマでお言葉を頂いた。当時の思いや活動を通しての思いなど、様々な思いが寄せられている。

学部4回生になるのを目前に控えた春休み中に震災が起こり、立命館大学でも学生と教職員が一緒になって震災支援活動に動くようだとの情報を得て、Rnet に創立当初から関わっていました。当時、私に「ボランティアをしている」という意識は全くなく、ただただ"何かしなくては...！"という焦燥感に駆られて走っていたように思います。学内でいくつか震災支援イベントの企画に携わりもしましたが、基本的には、学生団体さんたちの活動に場を提供したり、団体同士で協働する機会を提供するなどを行なっていました。そうした私のわずかばかりの行動がどれほど実ったのかは分かりませんが、少なくともあのとき、行動する機会を探していた私に活動の場を与えていただき、関係者のみなさまには感謝いたしております。私を巻き込んだり、私に巻き込まれたりしたみなさん、いまさらですが、ありがとうございました。

（世古　和希／元 311+Rnet 事務局メンバー）

大学1回生の春休み中に発生した東日本大震災は私に大きな衝撃を与え、同じ日本人としての使命感から東日本大震災の復興支援に関わる決意をしました。震災が発生した年の夏休みに宮城県亘理町で復興のお手伝いをさせてもらった後に、このままで支援の手が終わってならないと感じ、Rnet 事務局の一員となりました。Rnet では主に、関西にいても復興支援に携わることができることについて考え、震災復興支援団体とのネットワークの確立に向けた取り組みをしてきました。そうすると、人を巻き込むということだけでなく、自らも改めて震災というものについて考える機会も多く得られました。東北のヒト・マチが元気になるためには、まだまだ私達日本人全員の元気が必要だと感じています。今後も、様々な分野から東北のことについて考え、復興支援に携わっていきたい所存です。

（国島　岳大／元 311+Rnet 事務局メンバー）

私は大学に入学し何かボランティアをしたいと思いRnet が主催するボラフェスに参加しました。そこでInvestor という東北復興促進団体に出会いました。私はこれまでInvestor の一員として活動してきました。Rnet は立命館大学の東北の復興支援をしている学生団体のネットワークということで私達も活動に参加させていただきました。Rnet での活動は新入生のためのボラフェスや学園祭でのブース出展また勉強会などに参加させていただきました。そのような活動を行わせていただき、同じ志で活動している学生との関わりや、新しく何かはじめようと動いている新入生や学生との関わりの機会は私だけでなくInvestor の活動をより刺激的にまた、活発にさせてくれる場でありました。これまでRnet の活動で得たものをこれからもInvestor としてまた一人の学生として活かしていきます。

（庄司　拓哉／Investor 代表）

今回の解散には､2011 年より 2 年間関わっていた自分としては非常に残念に思っております。私にとってRnet は、石巻出身である自分としては、「自分に何ができるのか、地元に還元できるのは何か」という思いに応えてくれる場であったと思います。被災地の現状を伝える広報活動、募金活動を中心にやってきましたが、中には地元品を販売する活動もあったりして、自分の中にあったボランティアのイメージと違う活動もやっていたことを思い出します。意識の高い人々とも出会い、自分にできることをとにかくやってみようという気にさせてくれたRnet という場に、本当に感謝しています。今回の一報は突然の出来事でしたが、私と被災地の関係はこれからも途切れることはないです。それは住んでいる、いた人々にとっても同じだと思います。その関係が途切れない限り、私は地元を見捨て、忘れることは無いし、そう生きていく所存です。

（大西 悼／元 311+Rnet 事務局メンバー）

Rnet の立ち上げには､東北や関東で東日本大震災を体験した学生の存在が大きかったように思います。3.11 のあと、「自分の故郷が、多大な被害にあったにもかかわらず、自分たち自身は大学で関西にいて直接地元に関わることができない」ことに、もがき苦しみ、葛藤している友人たちと多く出会いました。それぞれに、現場の被災状況と自分がいる関西の環境のあまりの違いに困惑し、一人一人自身に突きつけられた問いや思いを、なかなか他の人と共有できないことに葛藤した時期であったように思います。そうした思いや悩みを、私たち自身がまず共有できる場をつくろう、そして、関西から東北へは遠いけれども、ともに考え、出来ることを探してみようというところから､人が集まりだし､立命館大学震災支援ネットワーク「311+Rnet」が生まれました。

（柳瀬 顕／元 311+Rnet 事務局メンバー）

Rnet は、学生と大学が協力しあって課題解決する組織として、一つの理想形でした。被災地から離れている京都で、何かを変えようと行動し続けた学生と、サポートする大学。そこで生まれる企画は、熱意を感じるものばかりでした。震災から 1 年たった夏、京都では亀岡・宇治・衣笠などで水害が発生。その時、私が所属していた団体での災害ボランティア活動に、立命館大学から様々なご協力をいただきました。それが実現できたのも Rnet があったからこそ。様々なチームが協力することで､1+1>2 になり得ることを感じました。今後も、身近な場所で自然災害が起こるかもしれません。そんな時にどうするか。今までやってきたように、提供できるものは互いに提供しあって、課題解決をしてくだされば と思います。もちろん、卒業生も。

（新原 稔貴／元 IVUSA）

震災発生当時、私は福島県に住んでおり被災しました。高校生だった私は、大学で被災地についても学びたいと思い、災害復興支援室をはじめ、被災地との結びつきが強い立命館大学を選びました。Rnet の活動でご一緒したのは、2013 年の3.11 追悼企画内のイベント運営でした。学生が主体となって、我が故郷である被災地に向けて開催しようとしていることを知り、大変嬉しかったです。そして、協力したいと思い参加しました。私は、距離の離れた関西だからこそ、被災地の現状を客観的にとらえて、サポートすることができると考えます。また、学生である私たちは、この震災を風化させぬよう努める必要があります。この役割をRnet は担っていたと感じていました。311+R の解散は残念ですが、今後もメンバーの方々には被災地との関わりを持ち、活躍してほしいと願います。私自身も、被災者としての一面を宿命と捉え、これからも積極的に活動していきたいです。

（齋藤 怜／いのちのつどい 2013 学生自主企画運営メンバー）

私が Rnet での活動を決意したのは、震災が起こった直後「なにかしたい、なにかしなければいけない」と言った漠然な思いからです。はっきりとした目的意識はないまま始めた活動でしたが、得るものは本当にたくさんありました。実際に現地へ赴きボランティアをさせていただく中で、災害の恐ろしさを現地の方々から教えていただくこともありました。支援活動を行う他学生と意見を交わす機会もあり、刺激を受けることもありました。本当に有意義な活動に参加できたと感じています。私は現在は社会人ですが、学生時代に上記の様に得た学びや考え方は、今でも財産であると感じています。行ってきた活動が、私の財産となっただけでなく、誰かの喜びや学びへも繋がっていれば幸いです。

（野一色 由里加／元 311+Rnet 事務局メンバー）

大学時代に多くの時間を費やした 311+Rnet が活動を終了するということに非常にさみしさを感じております。大学に入学して一年も経っておらず、それなりに楽しい大学生活を送っていた私でしたが、東日本大震災は私が生きてきた中で最も印象的な出来事でした。その後、私にもできることはないだろうかと思い、被災地支援に力を入れている当事務局を見つけ、入局した次第です。ベンチャー的な精神が強く、あれもやろうこれもやろうとする日々はそれなりにキツイものでしたが、一方充実したものでした。Rnet での活動では被災者の方、また震災支援活動に参加する多くの大学生・教職員の方と交流を持てました。自分が誰かの役に立とうと震災支援活動に参加しておりましたが、自分自身の成長にもつながるよいきっかけとなりました。当団体が活動を終えるということ、それはその名が示す通り、被災地が自立し、私たちが必要とされなくなった良いステップなのかもしれません。

（岡本 翔平／元 311+Rnet 事務局メンバー）

地震が起こった当時、私は就職活動をし社会に出ることについて、何一つ疑問に思わずに過ごしていました。地震はそんな私に突如現れ、学生生活を変えました。最初は自分が情報を得るために Rnet に関わりだしました。しかし日々様々な情報を得る中で、いつしかネットワークで関わる皆様の想いに触れ、就活等の自分のことよりも真剣に向かい合うべきものとなりました。Rnet では主に、他団体との関わりをもち、他の団体同士をつなぐ役割に従事しました。事務局のメンバーは様々な人達の想いや熱を受け、皆様に現状を伝えたいという想いでいつも動いていました。自分に出来ることは目の前の人、関わる人少しでも想いを伝えることだと気づき、行動できたのは、Rnet を通じて出会えた皆様が本当に東北のことを思っていたからだと思います。Rnet 事務局のメンバーがその想いを少しでも形に出来ていたなら幸いです。この団体、活動で得たものが、今の自分を作っています。ボランティアを全く知らない、拙い自分でしたが、そんな自分でも関われる環境を与えてくださったこの団体、仲間達に本当に感謝しております。

（白井 雄士／元 311+Rnet 事務局メンバー）

私が東日本大震災を知ったのは、留学先であるニュージーランドで大学の終業式を行っている時でした。その時に先生のスマートフォンで見た津波映像の衝撃を今も鮮明に覚えています。日本に帰国後、今度は原子力発電所の事故を知り、さらに衝撃を受けました。これは本当に現実なのか、本当に日本で起きていることなのかと毎日テレビの映像に釘付けでした。311+Rnet に入ったのは、震災に関して何か手助けがしたいというよりも、一個人として、この震災に関わりたいという思いからでした。この団体を通じて私が行ったことや、注いだエネルギーというのは、正直あまり大きなものではなかったかもしれません。しかし、震災に少しでも関わり、

どこかの誰かに少しでも影響を与えれたとしたら、この行動を起こしてよかったと思えます。この団体に所属していたからこそ出来たことや出会いはたくさんあります。ここで得たことは今後も持ち続けていきたいです。

（田村 望／元 311+Rnet 事務局メンバー）

あの日、関東で大きな揺れを経験。家族もなかなか連絡が取れず帰宅難民に。余震が続き眠れない夜を過ごしました。そんな中、テレビで見た甚大な被害、そして家族を探し歩く人。他人事には到底思えず、自分にも何かできないか？という思いから 311+Rnet に参加しました。関西、被災地、多くの人との出会いのきっかけをもたらしてくれた Rnet。今何が求められているのか？自分には何ができるのか？多くの人と出会い、それぞれが活動していること、そしてそれぞれの思いを共有したことで、何かしたいという思いを実際に行動に移すきっかけを多くいただきました。私も微力ながら誰かの笑顔のために役に立てていれば幸いです。そしてこれからも。

（澄田 彩／元 311+Rnet 事務局メンバー）

311+Rnet の出会いは 2011 年 6 月、Rnet 主催のイベントに参加したことがきっかけでした。私は山形県出身で、発災直後から支援活動に取り組んでいましたが、本学進学のために東北を離れて関西に。遠く離れた関西から支援活動に関わり続けていくにはどうしたらいいのかも分からず、途方に暮れていたときに Rnet と出会いました。Rnet 事務局員として活動していた約 2 年間、他局員と共に悩み・語り合った時間は忘れることができません。Rnet は学内にある復興支援団体のネットワーク化に尽力してきましたが、加盟団体の学生が心を込めて、そして学生らしいユニークなアイディアで東北と繋がり続けている姿に、沢山の勇気をもらいました。そして、そのような学生による活動が活発に行われてきたのも、教職員の皆さまの支えと後押しがあったからこそだと実感しています。心強い仲間と、素晴らしい環境の中で活動できたことを誇りに思うと同時に、311+Rnet で出会った全ての皆さまに感謝いたします。

（栗田 みなみ／元 311+Rnet 事務局メンバー）

大学 1 回生の 3 月に東日本大震災があり、学生コーディネーターとして活動していた私は震災によって少なくなるであろう通常のボランティア活動の支援を行おうと考え、あえて活動を行いませんでした。しかし、2011 年 10 月に学生オフィスによる APU 天空祭へ企画を派遣する事業があり、初めて東日本大震災や 311+Rnet、APU-NEST と関わりました。天空祭では東北から離れた地でも震災を風化させないため、話し合いながら書き出すワールドカフェを 311+Rnet と学生コーディネーターで協力して行いました。次の年も、天空祭で震災を身近に感じてもらう企画を行い、震災から 2 年たった大分でも、なおも関心事になっていることを体感しました。活動が終わった後は、東北に訪れたり、震災時に大学はどう動いたかという調査を行っており、東日本大震災に関わるきっかけを 311+Rnet からもらったと考えています。

（坂本 圭優／サービスラーニングセンター学生コーディネーター）

そよ風届け隊は、2013 年 2 月より福島県いわき市の仮設住宅で足湯を使った傾聴活動を始めました。震災から少し期間が経ってからの活動開始。何もかもが 試行錯誤の中での活動でした。そんな中での 2013 年 3 月 11 日の“いのちのつどい”では、311+Rnet さんが主催してくださった学生交流企画にて活動について発表させていただきました。そよ風届け隊にとっては活動内容や想いを発信する初めての機会でした。関西から遠い東北への熱い思いを持つ他の団体のお話を聞くことができ、大変貴重な機会を与えていただきました。また、少人数のトークの

時間では、そよ風届け隊として誇りを持って大切にしていくべきものを見つけることができました。2014 年8 月6 回目の活動を行います。これまで活動を継続してくることができたのも、あの時、あの場にいることができたからだと感じています。

（西崎 芽衣／そよ風届け隊）

はじめて岩手県に行ったとき、私は大学2 回生でした。現地は予想以上のガレキの山、広がる野原。仮設住宅にお邪魔すると住民の方の色んな姿がありました。前向きに生活再建しようとする姿、震災が風化するのが怖いという声。京都に帰って考えました。私達にできることは何だろう。京都からできることは自分の見たことを周りに伝え、現地の方が恐れていた震災の風化を防ぐこと。Rnet には大学で震災について多くの方に知って頂くための沢山の機会を頂きました。新歓や学祭での展示、定期的な企画。どれも学生に震災について知り、考えるきっかけをつくり、震災に関わる活動をする学生同士を繋ぐものでした。私も沢山の方と繋がれて、発信するのみならず、東北の色んな姿を知ることができました。Rnet が無くなるのは寂しいですが、Rnet が作った繋がりは学生から学生へ引き継がれていくと思います。本当にありがとうございました！

（川路 葉月／元関西 GINGA-NET）

2011 年3 月11 日14 時46 分18 秒、私は宮城県仙台市にある実家の食器棚の下敷きになっていました。「死ぬんだ」そう思ったとき、冗談みたく過去が走馬灯のように駆け巡りました。物で散乱したリビングを抜けベランダ出ると、5 キロ先の海から津波が来ました。隣町の名取市閖上地区が灰色の波に塗り潰されていくのを呆然と眺めていました。強烈な非日常の世界である地元と、以前と変わらない日常が繰り替えされている京都。大学に戻った私は、そのギャップに戸惑い苦しんでいました。そんなとき、311+Rnet と出会いました。Rnet のメンバーは、混乱する私と一緒に悩んでくれました。何ができるかを、真剣に考えてくれました。私は、人の無力さ、脆さ、傲慢さを叩き付けられるような経験をしました。けれども同時に、人は無力だからこそ助け合けあい、脆いからこそ慰め合い、傲慢だからこそ過去に、他者に、自然に学ぶという素晴らしい力を持っている。このことを311+Rnet での活動を通じて教えてもらうことができました。関わりを持って頂いた全ての方に、心から感謝いたします。

（渥美 勉／元 311+Rnet 事務局メンバー）

東日本大震災が起こり、自分にも何かできることがないかという思いがずっとありました。そして311+Rnet のことを知り活動するようになりました。復興支援と聞くと現地へのボランティアという考えを思い浮かべがちですが、311+Rnet では関西でのネットワーク作りや防災活動など、現地に行かなくてもできること行ってきました。ネットワーク作りを行っていく中では他団体の方と関わることができ、たくさんの方と意見交換をすることができとても勉強になりました。また、被災された方が作られた物を販売したり、現地の状況を伝えたり、現地に行くことが出来なくても震災ボランティアは行えると気付くことができました。Rnet で活動したのは約1 年間と短かったですが、今まで経験したことのなかったことをたくさん経験させて頂き、少しかもしれませんが成長することができた気がします。ありがとうございました。

（西田 有希／元 311+Rnet 事務局メンバー）

私は2011 年9 月～2012 年1 月末までの約5 ヶ月間「311+Rnet」の活動に参加しました。その時「311+Rnet」は活動の方向性を見失いつつあり、当時のメンバーと共に立て直しを図っていました。「この団体がすべきことは何か」「自分たちにできることは何か」などをそれぞれが真

剣に考え、話し合い、行動に移してきました。具体的には、震災復興支援活動を行っている団体と協力して学園祭でブースを出して東北の情報を発信したり、今後どうしていくかについてブースを訪れた人と話し合ったりしました。またそのようなイベントの他にも、常設展示を行ったり、復興支援活動をしている団体の情報を整理したりしました。これらは社会に対する目に見える成果というものが感じにくい活動でしたが、私の人生においては本当にかけがえのない活動でした。「次」の災害は必ず来ます。その時に一人でも多くの人が救われるよう「学び」を「行動」として続けていきたいと思います。

（阿部 辰樹／元 311+Rnet 事務局メンバー）

始めの出会いは初めての震災ボランティア参加後の 2011 年 9 月でした。私は阪神地域に住んでいる影響もあり、何かしたいという気持ちが一杯でした。ボランティアに参加してみて、メディアで見た以上の光景に何も言葉がでませんでした。ショックとかそんな簡単な言葉で終わらしてはいけない、忘れてはいけない、伝えていかなければいけないと思いました。では実際、関西での継続的な支援をできるのは何かと考えた際に出会ったのが311+Rnet でした。311+Rnet の出会いは私の大学生活を大きく変えるものでした。震災・防災・減災・支援・ボランティア等多くのことを考えるきっかけになりましたし、多くを学びました。そして何よりもネットワーク、繋がりの大切さを学びました。この活動を通して、一人でも多くの人に震災について考えるきっかけになっていれば良いと思いました。そして、私は今後も継続的な支援を行っていきたいと考えております。

（佐野 匠／元 311+Rnet 事務局メンバー）

私にとって「311+Rnet」は、一人で感じていた私の復興への思いでも、大きなエネルギーになれることを確信した場所でした。私は「参考書宅救便」の一員として311+Rnet に参加しました。それまでは3 人で小さいながらも東北の中高生の学習支援を行っていました。その頃は、自分たちの活動を自分なりに理解し、何をやるべきかを考えながらやっていくのに精一杯でした。しかし、311+Rnet に参加してから、他のアプローチからの復興を目にし、今まで感じていた、「こんな小さな活動で本当に助けになるのか。」という復興支援に対する漠然とした不安や疑問が少し軽くなったように感じました。たくさんの人が復興へ思いを寄せていて、その思いの一つ一つは小さいけれど、集まったら大きなエネルギーになることができるということを学びました。

（下田 みのり／参考書宅救便）

「311+Rnet 結成前夜のこと」3 月 11 日の京都の昼下がり、はるか東北で大変な災害が起きているとは、その時は誰も考えなかった。だが、情報が錯綜する中で少しずつ浮かび上がってきた被害の大きさは私たちの想像を絶するものだった。夜になると、「東北へ行きたい」という学生からの相談を何件も受けた。私は「すぐに東北に向かわず、情報を待て」と告げた。震災のその日に、学生たちはすでに動き始めていた。週が明けると、学生たちがセンターを訪れた。「どうなっているのか知りたい」という学生がいた。「東北で何かしたい」と考える学生がいた。「関西で何か力になれることを」と考える学生もいた。彼らがつながり、思いを重ね合わせる場所が必要だと思った。「311+Rnet」はそんな背景の中で生まれた。情報を得ること、情報を共有すること、仲間を見つけること、相談できること、話し合うこと。何ができるかわからないが、何かしなくては、と考える学生たちが集って生まれた311+Rnet は、多くの学生に「行動する勇気」を与えたと考えている。

（井上 泰夫／元サービスラーニングセンター職員）

東日本大震災が起きて、なんとなく「私も何かしたい」という想いはありました。しかし、遠い東北での出来事をテレビで見ているだけでは、明確な私の役割を認識できずにいました。そんな私のそばに311+Rnetができ、すでに動き出した学生やそれを支援しようとする教職員など、多くの人や情報が集まってきました。ここに至って、ようやく私は自分の役割を認識できたのです。何かしたいという想いをもつ学生、具体的な活動のアイディアをもつ学生、場所やモノなどの資源をもつ教職員、そうした人々をつなぐだけで、どんどん支援活動が生まれていきました。多くの人にとって、311+Rnetは自分の役割を果たすための便利な道具でした。しかし私にとっては、311+Rnetそのものが自分に役割を与えてくれる存在でした。311+Rnetからは離れても、まだまだ続く震災復興に向けた取り組みの中で私の役割を探すとき、いつもここでの経験を出発点にしています。

（小林 政夫／元サービスラーニングセンター職員）

2011年4月に衣笠とBKC両キャンパスにて開催された活動報告会でのメンバー募集の呼びかけがきっかけとなり、BKCでも311+Rnetのメンバーが集まり始めました。最初は数人でしたが、同年7月にBKC311+Rnetとして初めて開催した企画に参加した学生が複数加入し、人数が増え、活動も活発化していきました。「東北のために何かしたい」という想いを持って集まったメンバーが、どうすればその想いを周りに広げられるか、自分たちはどのように活動していけばいいのか、悩み、葛藤しながら、1つ1つの活動に向き合っていた姿が今でも印象に残っています。共感の輪を広げる難しさも楽しさも共に分かち合い、仲間として成長していく姿が頼もしくもあり、そんな学生のひたむきさが、私自身の活力にもなっていました。このつながりが切れることなく、また、この活動で得たことが糧となって、これからにつながっていくことを願っています。

（山﨑 智文／元サービスラーニングセンター職員）

311+Rnetには立命館大学OBとして、そして職員として2011年4月からの1年間関わらせていただきました。短い時間ではありましたが、学生や教職員の皆さんと悩みながらもいろんな企画を実施したり、組織体制を形作っていった記憶があります。私自身にとっても勉強の毎日でした。この311+Rnetには様々な想いを持った学生が集まっていた印象があります。東北に行って何かをしたい人、京都でできることを探している人、そんな人たちの受け皿のようになっていたのではないでしょうか。色んな人がいたからこそ、組織としてどういった方向性に進んでいくかをずっと考え、模索してきたことと思います。311+Rnetとしてはこれまでのような形でなくなりますが、蓄積が今後様々な形で生かされることを、311+Rnetの一員として期待しています。ひとまず、お疲れさまでした。

（米原 裕太郎／元サービスラーニングセンター職員）

311+Rnetの事務局メンバーと出会ったのは、東日本大震災から2年と1ヶ月弱の月日が経った2013年の春でした。これまで311+Rnetの中心となっていた事務局メンバーの代替わりや、ネットワーク団体の活動の変化、また地域によって復興段階が違うという変化がある中「遠く離れた関西から何ができるのか」「私たちの活動はどうつながるのだろうか」と日々悩む様子がありました。また、復興支援に関わる学生や団体をつなぎ支える役割から、自分たちの方向性が見えにくかったと思います。しかし、ネットワークを支える事務局があったからこそ、様々な団体が集まって情報交換をしながら勉強会を開いたり、合同で活動の発信ができたと思います。これからは団体ではなく、一人ひとりの活動になりますが、311+Rnetでの活動が「いい

経験になった」で終わらず、一人ひとりが思いを寄せ、これからを過ごしていってほしいと願っています。

（高橋 あゆみ／サービスラーニングセンター職員）

大震災が起こった時、立命館大学では、すぐに学生へのメッセージを発表しました。この早さは、「何かしたい」という学生、既に動き出している学生の多さに後押しされたことが大きかったのではないでしょうか。311+Rnet（に後になるもの）の呼びかけをしたのは、2 回目のメッセージだったと思います。集まってくれた学生たちは、非常にスマートかつフットワーク軽く、SNS など当時の IT を駆使したネットワーク作りや情報収集に取り組んでおり、新鮮で印象的でした。また、私自身「大学における震災支援とはいったい何だろう」と、様々な調整過程において悩んだ時期もありましたが、そんな 311+Rnet の学生たちの姿にずいぶんと励まされました。直接的な支援活動をしないこと、教職員・学生の有志によるスタート、などにより、組織運営的には難しい点もあったと思いますが、関わった全てのみなさん、3 年間の活動お疲れ様でした。それぞれの方が、あの時間に主体的に関わったという事実が、重要だという気がしています。

（冨田 沙樹／元サービスラーニングセンター職員・国際関係学部事務室）

(2)後世へ

～事務局代表挨拶～

あの日のことは今でも鮮明に憶えています。2011 年 3 月 11 日。私は当時高校 2 年生でした。その日は期末試験最終日で午後から部活もあり地震があったのを知ったのは自宅に帰宅した夜のことでした。今までに見たことのない大津波が街を飲み込む映像、宮城・気仙沼市の火災の映像、あまりに突然すぎてなかなかこの現実を信じることができず、とりあえずこれまでの地震とは全く違うと思いました。そして徐々にこの東日本大震災の被害の実態が明らかになり、自分もやっとこの震災を受け入れることができました。その後次第に全国各地からボランティアが集まったり、様々な場所で義援金を募る活動も始まりました。そのようなボランティア参加者には私と同世代の高校生、大学生も数多くいました。「私も何かしないと。」そう思っていましたが何もできず高校を卒業しました。

大学生になり、高校生の時に何もできなかった震災支援活動に携わりたいと思い、私はこの 311+Rnet に入りました。この団体に入るまで、私はボランティアとは現地で活動するという固定観念を持っていました。しかし、この団体は主に現地に行って活動するのではなく、ボランティアに行きたいという学生をコーディネートしたり、関西にある震災支援団体とイベントをしたりと「関西からできる震災支援」が活動の中心でした。私はこの団体に約 2 年在籍していましたが本当にこの団体に入ってよかったと思っています。団体として関西で、個人として東北で活動してきましたが、両方の活動を経験することで 311+Rnet の活動の重要性を感じることができました。関西から遠く離れた東北に頻繁に行くのは難しいですし、現地での活動はどうしても単発になってしまうことが多いです。その点 311+Rnet では日々震災に関する活動ができ、東北で感じたこと、したいと思ったことを学園祭やその他のイベントでできる団体でした。活動の大半がボランティアコーディネートという裏方な仕事で一見地味な印象もありますが、この体制がないとボランティアに行きたいけど何をすればいいのか、またはどんなボランティアがあるのか分からないという人が分からないまま行動に移せないかもしれないのです。

日本では、これからも間違いなく大地震をはじめとした大災害が発生します。その時に現地に行って活動するだけではなく、何かしたいと思っている人たちのためのサポート体制をしっかり作るためにも、少しでも多くの人がこのような活動を行ってくれることを願っています。

立命館大学震災支援活動情報ネットワーク 311+Rnet
2013 年度代表　室賀　翔太

～ボランティア活動の再考を通じてボランティア文化の再興を～

「近年、災害時にボランティアが果たす役割が注目を浴びるようになり、その重要性が認められれば認められるほど奇妙なことに「災害直後に大勢のボランティアが行くと、被災地が混乱する」という根拠不明の言説が広がっていった。」これは 2011 年 6 月、被災地 NGO 協働センターの村井雅清さんが緊急出版した『災害ボランティアの心構え』（ソフトバンク新書）の一節（p.27）です。阪神・淡路大震災における多くの支援に注目が集まったことで 1995 年はボランティア元年と言われました。その一方で、今後、2011 年は何の元年として位置づけられるでしょうか。

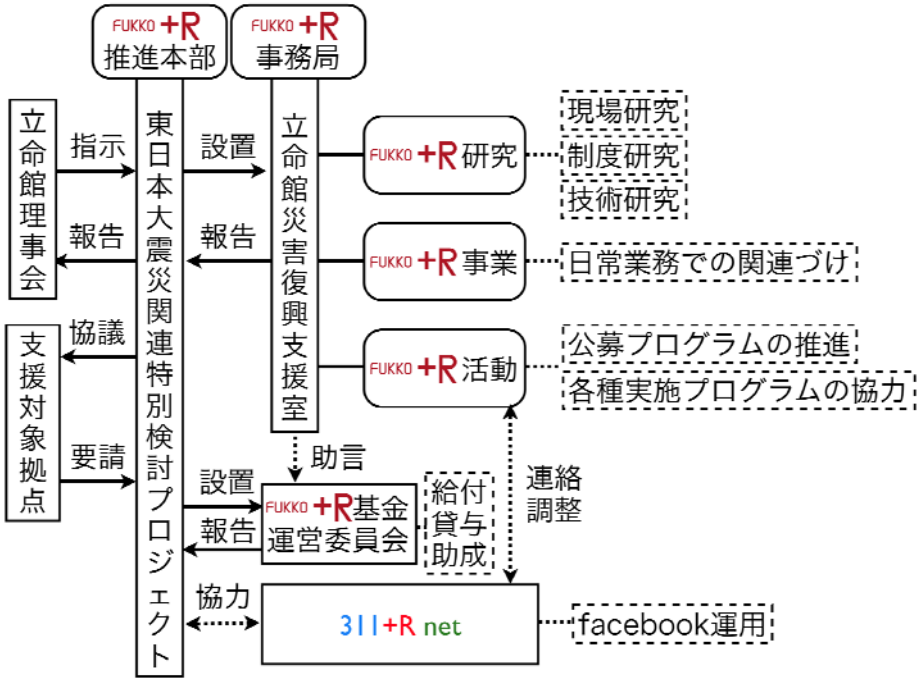
冒頭の言葉から推察すれば、2011 年はボランティア再考の元年となったのではないかと推察します。この 16 年、1998 年の特定非営利活動促進法（NPO 法）の成立もあって、多くの社会的・文化的な活動が、地域に根ざして展開されるようになってきました。その一方で、自治体や企業との連携・協働による市民社会への期待や挑戦により、ボランティア活動団体の組織化は促されたものの、むしろ 1992 年に文部省（当時）の生涯学習審議会でも確認されたボランティアの 4 つの特性（自発性、無償性、公共性、先駆性）をむしろ相対化させてしまったのではないでしょうか。つまり、「ほっとけない」（大阪ボランティア協会の早瀬昇さん）、「言われなくてもやる、言われてもしない」（阪神大震災地元 NGO 連絡協議会の代表を務めた草地賢一さん）の言葉は、時を経て東日本大震災における支援活動を評価する際に、今一度大切にしたい観点となるでしょう。（参考までに、次ページにて、2011 年 5 月 4 日の打合せ資料を示します。）

未だ復興の途上にある段階において、311+Rnet はその活動を閉じることになったのですが、仮に「東日本大震災から復興した」と言える日が来たとき、あるいは再び未曾有の災害に見舞われたとき、改めて立命館大学における東日本大震災の発災当初の活動に関心が向けられるなら、「ても」と「こそ」と「でも」の 3 つを考えて活動を構想・設計・展開して欲しいと願っています。今回、311+Rnet は「行かなくても」できることを探りました。しかし、現地に「行ってこそ」できること、したいこと、すべきことが見えてくることがあるはずです。そうして、現地に行く／行かない、それぞれの選択が重ねる中で、さらに言えば立場や経験が異なる中で、「それでも何かをやりとげる」ことが大切となるのではないでしょうか。

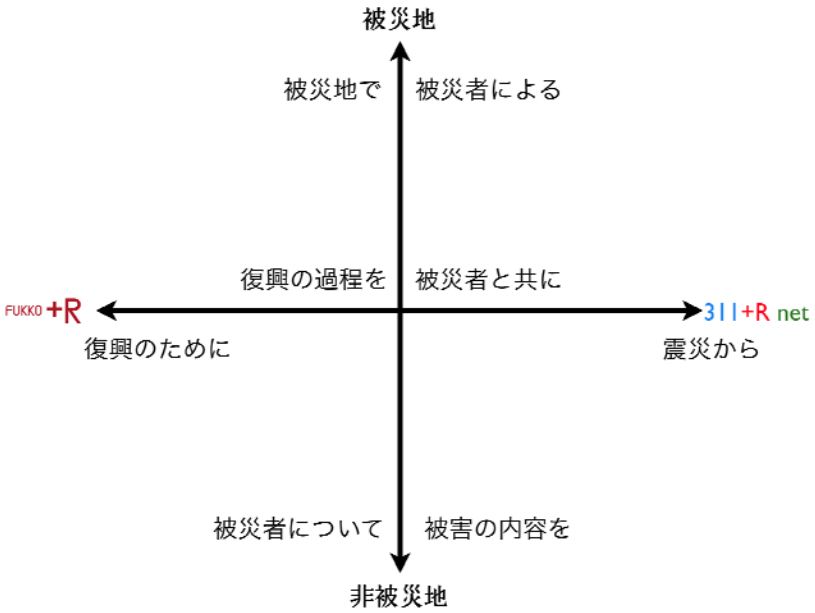
2011 年 4 月 11 日の「東北地方太平洋沖地震」緊急対策連絡調整会議の文書によれば、東日本大震災において、立命館大学は「震災発生後は被害が甚大であること、現場の状況に関する情報が不足していたことなどから、当面の被災地へ向かう自主活動は自粛するよう『呼びかけ』を行った」ために 311+Rnet は生まれ、そして個人と団体の連携・協働（つまり、ネットワーク）によって「学内、卒業式・入学式等でも学生による積極的な募金活動が行われ、1,044,167 円が集まっている」ことが記されています。その後、立命館では小学校・4 つの中高・そして立命館大学と立命館アジア太平洋大学のオール立命館による復興支援活動の窓口として、立命館災害復興支援室が立ち上がっていることもあり、今後は 311+Rnet が担ってきた役割も支援室が担っていくこととなるでしょう。しかし、4 月 11 日の文書の末尾「今後の展望」に記されたこと、具体的には「学生の主体的な活動を引き出し、促進しつつ、こうした活動への適切な関わり方を教育的に援助していくことから開始し、本学の建学の精神、教学理念を生かす」という点は、311+Rnet においてこそ、常に重視されなければならなかったと内省を重ねています。転じて、冒頭の村井さんの言葉は、組織や経験者や専門家においては、「何かしたい」と思いを抱く人々の思いを管理し、活動に秩序を求める傾向があるという落とし穴を指摘いただいたと捉え、今次の大震災を通して、改めてボランティアの文化が再興されていくことを願わずにはいられません。

立命館大学サービスラーニングセンター・立命館災害復興支援室
山口 洋典

【参考：立命館災害復興支援室設置後の立命館大学生による復興支援活動の可能性と展望】



【救援から復興への移行期を見越した取り組みの相関関係の整理案】



【全学・学生の立場と活動対象地の双方の違いから見た活動の力点の整理案】

（ともに 2011 年 5 月 4 日のサービスラーニングセンター・学生オフィスの非公式の打合せ資料より）

(3)情報発信・新聞掲載一覧

311+Rnet の活動は、学内での掲示板や活動報告会等の他、主にウェブサイト、SNS を利用して発信した。

【311+Rnet ウェブサイト】立命館大学としての公式ページ。イベント案内や活動レポート等を発信。

【Facebook ページ】

【Twitter】

【新聞掲載一覧】

掲載紙	日付	タイトル
毎日新聞	2011/3/22	立命館大卒業式で、有志が募金協力呼びかけ
京都新聞	2011/6/7	手作り地図に支援紹介
京都新聞	2011/7/12	被災地つなぐ希望の灯
京都新聞	2011/10/30	被災地支援 学生何できる？
朝日新聞	2012/6/15	立命大、手作りの品など販売

(4)公表文書等一覧

発信月日	発信内容	参考 URL
2011/3/15	東北地方太平洋沖地震への災害救援活動を考えているみなさんへ	http://www.ritsumei.jp/news/detail_j/topics/7927/publish/3/year/2011
2011/3/18	街頭募金を行う場合の注意事項	http://www.ritsumei.jp/news/detail_j/topics/7958/year/2011
2011/3/18	東北地方太平洋沖地震の災害支援ボランティア等を目的とした学生の活動支援について	http://www.ritsumei.jp/news/detail_j/topics/7959/year/2011
2011/4/14	東日本大震災被災地でのボランティア活動について	http://www.ritsumei.jp/news/detail_j/topics/8186/year/2011
2011/4/27	－立命館大学生のみなさんへ－ 東日本大震災関連のボランティア活動に関わる教学上の取り扱いについて	http://www.ritsumei.jp/news/detail_j/topics/8259/year/2011
2011/4/28	東日本大震災被災地でのボランティア活動に参加する場合の保健・衛生についての注意事項	http://www.ritsumei.jp/news/detail_j/topics/8276/year/2011

(5)編集後記

「忘れない」

次の世代に向けて、我々の活動の軌跡を残しておきたい、という思いのもと、この報告書の作成が始まりました。4 年という月日は、長いようであっという間の出来事でした。その「たった」4 年の間にも、世の中はめまぐるしく変化してきました。震災発生から日が経つごとに変化する世の中や現地のニーズに合わせて、フェーズごとに活動方法を変え、「今、私たちに何が求められているのか」「私たちには何ができるのか」一心不乱に考え続けた 4 年間だったように思います。この報告書作成にあたり、311+Rnet 成立当初からの活動を振り返ると、本当に多岐にわたる活動を行ってきたのだなあ、と感慨深いものがありました。それと同時に、「あの時こうしていればなあ」「本当に今、活動を終了してしまってもいいのか」といった後悔にも似た感情がわきあがってきたのも事実です。この 4 年間の活動を通し「忘れない」ために種をまくことができていたら嬉しいです。そして、こうした我々の葛藤等が報告書から伝わり、次の世代の参考になりますよう祈っております。団体としての活動が終了した後も我々は、一日も早い復興に向けて、各々貢献していけたらと考えています。311+Rnet 設立からこれまで関わってきてくださった多くの皆様への感謝の言葉で締めくくりたいと思います。本当にありがとうございました。

立命館大学震災支援活動情報ネットワーク 311+Rnet
2012 年度代表　河村　優衣

立命館大学震災支援活動情報ネットワーク（311+Rnet）活動報告書

2016 年 3 月 11 日発行

編集　立命館大学震災支援活動情報ネットワーク（311+Rnet）活動報告書作成実行委員会
有志メンバー：河村 優衣、清水 大地、室賀 翔太、竹市 早織、丹司 聖人

発行　立命館大学サービスラーニングセンター、立命館大学学生オフィス

執筆者の所属および役職は 2015 年 3 月時点のものです。